
灼眼の転生者

黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灼眼の転生者

【Nコード】

N2511S

【作者名】

黒猫

【あらすじ】

原作をほとんど知らない転生者が行く『リリカルなのは』の世界。彼女の眼に映る物語とは？

* 第二夜終盤と第三夜、変更しました。

* 4 / 20 第五夜、変更しました。

* 4 / 21 第十一夜、変更しました。

注意、この物語に出てくる一部の宝具は改変されています。

プロローグ

side ????

「…んっ…あれ？ 二二…ど二二？」

突然ですが私は真っ白な空間に浮かんでいました。え、っーかホントに此処何処！？ 私は確か学校の通学路歩いてたはずだよね！？

「…………気が付かれましたか」

若い男の声をした方を向くと、そこにはさっき助けた黒猫がいた。

…あれ、『助けた』？ ……ああっ！！

「そうだった！ 私、この子を助けてトラックに撥ねられて…」

「ええ。そしてその所為であなたは死んでしまいました」

思いだした思いだした。登校しようと通学路の歩道を歩いていたなら、何かを銜えたこの子が車道を横断していて、そこに電話をしながら運転していたトラックが突っ込んできたんだっただ。で、この子はこの子で銜えたものを落として、それを取ろうとしてたし。で、それを見ていたら反射的に飛び出して、この子を突き飛ばした瞬間に強い衝撃が来て、気付いたら此処にいた。……思い返してみれば、シチュが『猫の恩返し』そっくりなんですけど。助けたのは王子じゃなくて黒猫だけだ。

そんなことを考えてると、突然この子が土下座した。

「申し訳ない！ 私の不注意のせいで、あなたを…死なせてしまっ
て…！」

泣いているのか、最後辺りは嗚咽が混じっていた。でも…

「別にいいよ。私がただ助けただけだから。君が謝らなくていいんだよ」

「ですが……！」

「いいって言ったら良いの！」

軽くデコピンして、この子の頭を上げさせる。

「私が勝手に首突っ込んで、その結果がこうなっただけ。だから君が気にしなくていいの。…ね？」

「…わかりました」

「よろしい」

それから十分後。クロ介（勝手に命名）が落ち着いて、事情を話してくれた。なんでもクロ介は天使で、神様の恋人にプレゼントを買いに行つて帰る最中にこうなつたらしい。… ホントに『猫の恩返し』そっくりだな。てゅーか疑問なんだけど、神様と天使の恋って許されるの？

それでもって、その神様が恋人を助けてくれたお礼に転生させてくれるらしい。うん、予想はしてた。だってこの状況テンプレ過ぎるし。

「それで、転生先は何処ですか？」

「『リリカルなのは』の世界です」

リリカルなのは？ ……あゝ。『妹type』でForceなら読んだことがある。StrikerSは友達に触りだけ教えてもらつたっけ。

「それでは転生する前に、希望する能力を三つまで言って下さい」「能力?」

「はい。何でも仰ってくれて構いません」

えっと、それじゃあ…

「まず一つ目。ECディバイダーの944と718を貰える? 殺人衝動は勿論無しで」

ディバイダーっていうのはForceに出てくる兵器で、フォルテイスってキャラ曰く『魔導殺し』らしい。ただ持つると殺人衝動が起きてしまい、それを我慢していると『ECウィルス』の暴走で肉塊に成ってしまうというデメリットを持つてる。さすがにそれは嫌だ。

「ですがそれだと、病化も無しになりますが宜しいでしょうか?」

「構わない。てゆーか、手が生えてくるようなびっくり人間になりにたくない」

「畏まりました。続きをどうぞ」

「それじゃあ二つ目。ナギクラスの『ネギま!』の魔力が欲しい。ただし高畑先生状態で」

高畑先生状態というのは、生まれつき呪文詠唱が出来ないという状態のこと。めんどくさいから詠唱したくないし、それに目的は他に
ある。

「AMF対策ですね」

「そう言っつこと」

A M Fというのは、魔力結合を阻害できるフィールド魔法のこと。
『ネギま!』の魔力は結合なんかしない筈だから、問題は無い筈。

「無効化されないよね?」

「ええ、そうです」

「…即答ですか」

まあ、そこは安心した。じゃあ最後。

「三つ目はリンカ コアをFランクにして」

「え! 宜しいのですか!?!」

「うん」

即答で答える。ぶつちゃけ本局に目を付けられるの嫌だし。

「…魂消たわ。そんなことを要求するなんて前代未聞よ?」

そう言いながらクロ介の後ろから猫がもう一匹来た。ただし…

「…ユキちゃん?」

『猫の恩返し』に出てくる王子様の恋猫、ユキちゃんの姿なのよ。
とゆーことは……

「恋人の神様?」

「ええ、その通りです」

左様ですか。で、如何されたのですか?

「最後の願いよ。あれはオプションにしてあげるから、考え直しな

さい」

「…了解です」

となると……あ。あれいいかも。

「シャナの姿と能力を下さい。ただし自在法は魔力消費に変更をお願いします」

「……それでいいのね？」

「はい」

「それじゃあ……貴女の次の人生に幸あれ」

その言葉と同時に強烈な眠気が襲ってきて、私は瞼を閉じた。

side out

プロローグ（後書き）

初転生小説です！

拙い文ですが、最後までお付き合いください。今度は絶対削除しません！

無印介入前のキャラ設定

- ・名前 月村鈴音
- ・種族 夜の一族
- ・姿 『灼眼のシャナ』のシャナそっくり
- ・魔力ランク F（『ネギま！』の魔力はSSSオーバー）
- ・備考1 転生者
- ・備考2 魔法使用不可
- ・スキル1 自在法（消費するのは存在の力ではなく魔力）
- ・スキル2 変声術
- ・スキル3 限定的な完全記憶能力
- ・詳細 ずずかの双子の姉として生まれた転生者。なぜか神様のオプシオンで覚えようと思ったことは全て覚えてしまう。
- 戦闘スタイルは945での接近戦か、719での中距離戦。
なお、封絶内では姿が炎髪灼眼になり、戦闘スタイルも『にえとのしやな贗殿遮那』を使った接近戦にかわる。その時だけシャナの声に変えている。
自在法もできるが、元がシャナなので不得意。
- ・イメージCV 竹達彩奈

無印介入前のキャラ設定（後書き）

945と719は、944と718の色違いです。性能に変更はありません。

第一夜 転生×猫又×会話（前書き）

サブタイトルは、できるだけH×Hの方式で書いていきます。

第一夜 転生×猫又×会話

誕生五年後：

side 鈴音

「すずかー！ 早くしないと置いてくよー！」
「鈴音、待ってよー！」

大きな庭を楽しそうに走り回る私たち。
どうも皆さん初めまして。月村鈴音です。名字の通り月村家に転生してしまいました。……いや、『リリカルなのは』は知らないけど、『とらは』はやったことがあるから知ってるの。ただ『とらは』と違って忍姉さんの下に双子の妹がいるけどね。一人は勿論私で、もう一人がすずか。ちなみに、二卵性双生児である。
そしてまあ、当然ながら赤ん坊からやり直しになったわけで、しかも生まれて五日後から意識がはつきりしてたから、最初の三年はマジで（恥ずかし過ぎて）地獄でした。
そして月村家に生まれたため、夜の一族になってます。ただ原作なら異性の血じゃないといけない筈だけど……

「すずかー。血を頂戴？」

「私も貰える？」

「はい」

かぶっ
×2

お互いの二の腕に噛み付く。

……と、このように月村家の人間以外の血だと、拒絶反応を起こしてしまう体質になってしまったようです。これに気付いたとき忍姉

さん大層驚いてたな。私もだけど。
そして、血が本当に美味しく感じてしまうのが困り物。なんか二十年物のワインより美味しいんですけど。

「「ごちそうさま」」

「二人ともー、ごはんよー！」

「「はいー！」」

忍姉さんに呼ばれて、リビングまで走って移動する。

ノエルさん（と、原作にいない筈の妹、ファリンさん）もいるし、普通に猫屋敷。ただ……

チリン

『鈴音：ちよつと』

……私を転生させてくれた神様がここに住んでいるのよ。話を聞いたら、禁断の恋をやらかしたせいでクロ介共々天界を追い出されたらしい。それでこの家に猫又（妖怪の一種。尻尾が二本生えているのが特徴）として居座っている、らしい。

私はずかを先に行かせて、念話でユキ（神様の名前）と話をすることにした。

『どうしたの、ユキちゃん？』

『デイベイダーだけど、カードの形にして机の上のタロットの束に紛れ込ませているわ』

『スートは？』

『剣の騎士が945。杖の？が719よ』

意味するのは…勇気と力ね。……あ、説明が必要？ 赤ん坊の時に寝ている間暇だったから自在法を組む練習をしたのよ。シャナの

スペックだったら自在法は不得意の筈だからね。それで今は制御の練習の為に未来予知の術式を組んで、その結果をタロットカードに出してるの。…説明終了。ところで…

『945とか、719って何?』

『この世界に既にある番号は使えないの。だから番号を一つずつらしたのよ。色違いだけど性能は同じだから安心して』

『ほい。了解』

念話終了。私は急いでリビングへ向かった。

着いてみると、皆ごはんを食べるのを待っていてくれた。

「鈴音、おっそーい！」

「また猫とお話してたの？」

すずかは怒った声を、忍姉さんは呆れたような声を出す。

「うん。そっだよー」

これは比喻じゃなくて、本当に猫限定で会話が出るのよ。それにしてもいつたい何でだろう？

『ルーンを助けてくれたから、オプションで付けといたのよ』

『……そう言うことはもつと早くに言ってくれますか?』

『あら、ごめんなさい』

……念話なのに、黒い笑みを浮かべたユキが見えたのは気のせいだ
と思いたい。ちなみに『ルーン』とはクロ介のこと。天界を追い出
された時に名前を失くしたから、ユキが付けた名前らしい。

まあ、それはさておき。今は……

「いただきます」

「「いただきますーす！」」

目の前の御馳走を味わうとしまししょうか！

s i d e o u t

第一夜 転生×猫又×会話（後書き）

猫っながらで月村家に転生させました。

第二夜 始まり×封絶×遮那(前書き)

時間を飛ばして、一気に介入させます。

第二夜 始まり×封絶×遮那

side 鈴音

時は進んで現在小学三年生。私はずかと共に私立聖祥大付属小学校に入学して、二度目の小学校生活を送っています。でもさ、なぜか知らないけどこの体、滅茶苦茶スペック高いんですけど。夜の一族だから運動能力が高いのは分かっていたけど…覚えようと思ったことは全部覚えちゃうし、忘れないってどういうこと!?

『それは私が『限定的な完全記憶能力』のオプションを付けたからよ』

『狙ったように念話を飛ばすのは止めてよ、ユキちゃん!』

まったく、心臓に悪いよ!

「ど、どうしたのよ鈴音!？」

「ふえ!?! い、いや何でもないよ!」

「鈴音ちゃん。慌てて言っても説得力無いよ?」

まあ、それは置いていて、……今私の心配をしてくれたのは小学校に入ってから友達で、アリサ・バニングスと高町なのである。なお、友達になった切っ掛けは一年生の時に起こった喧嘩。簡単に説明すると、アリサがずかをいじめててそこになのはが介入。大ゲンカに発展したところで、様子を見に来た私が仲裁した。……今の文面から分かるように、私はずか達とは違うクラスになっているんだ。まあ、寂しくは無いんだけど。ちなみに今は皆と一緒に下校しています。

「それより鈴音ちゃん。また占ってよー」
「うん。良いよ。ちよっと待ってて」

私は鞆の中からタロットを取り出し、左目を閉じて瞳の奥に自在式を展開させる。そしてカードの束から適当に一枚取り出す。出たカードは…

「え…っと……」

「「？」」

「どづしたの？」

……引いたのは崩れ去る塔の絵が描かれている『タワー』のカード。この正位置ということは意味は…

「…予期せぬ出来事に巻き込まれる」

「にやっ！？」

「……ちよっと、それシャレになってないわよ」

「でも……引いちゃったからには、絶対当たっちゃっよね」

「今のところ…百発百中だからね」

この前、聖杯の？のカードを逆位置で引いた時、その晩にイレインが襲撃してきた事もあったしね。……ちよっと待って、まさかこれが…

『助けて！』

「「！？」」

するといきなり、頭の中に聞いたことがない叫びが聞こえてきた。

「? なのは？」

「今、何か聞こえなかった？」

なのはも聞こえていたらしくて声のことを私たちに尋ねるが、アリスとすずかは頭に?マークが浮かべる。

『助けて!!』

二度目の声が聞こえた時、私となのはは走り出していた。しばらく走ると其処に…フェレットが倒れていた。

あのフェレットは動物病院に送り届けて今は夜。

私なのはの運勢が気になって、自在法を使ってもう一度タロットを引き直した。本来なら引くカードは変わらない筈だけど……

「……なんで? カードが変わってる」

今回引いたのは『魔術師』のカード。その正位置だから……

「…新しい出会い。…あれ？」

魔術師のカードの裏に、もう一枚カードがくっ付いていた。そのカードを見て嫌な予感がした私は、すぐさま家を飛び出した。当然ながら、忍姉さんから電話が掛かって来る。

「『ちよつと鈴音！ いきなり家を飛び出してどうしたの！？』」
「さつきなのはの運勢が気になって、もう一度カードを引いたんですよ！ そうしたら『魔術師』の正位置の裏にもう一枚カードが引っ付いていたんです！」

「『……なにが？』」

「金貨の？。その逆位置です」

「『！ それって！』」

すると、動物病院の方から爆音が聞こえてきた。

「…忍姉さん。もうすぐ現場に着きます」

「『ハア〜。……分かったわ。た・だ・し！ 無事に帰ってきてね』」

「了解！」

……電話を切つてすぐに足元に自在式を展開する。そして私は右手を右側へ振りぬくのと同時に…

「…封絶！」

トリガーワードを唱えた。すると円形に黒い糸が天に向かって伸び、天頂にて交わると世界が緋色に変わる。世界が変わったと同時に私の髪と瞳は炎髪灼眼へと変わり、服も御崎高校の制服の上に黒衣のコート『夜笠』を纏うスタイルに変わった。そして夜笠をはためかせ、現場へと急行した。

着いてみると、女とフェレットが気色悪い何かに襲われていて、その爪が迫っていた。それを認識した私は跳躍しつつ、夜笠の内側に右手を入れて刀の柄を顕現させる。そしてそれを…

「はあっ！」

抜きながらそれを気色悪い物体へ唐竹に打ち込みながら、女の前に移動する。するとそれは真っ二つに切れた。でも……

(手応えがない？ 思念体か何かk?) 「鈴音ちゃん？」

思考していると、後ろにいるこいつから声を掛けられた。だけど……

「誰？ そいつ」

「……え？」

…今の私は『月村鈴音』じゃない。だから、こう言う風に答える

「あなたは…誰ですか？」

次はフェレットが訪ねてきた。…今の私に名前は無い。だから……

「私は、『炎髪灼眼の討ち手』よ」

私の身長と同じくらいの大太刀『贄殿遮那』を正眼に構えながら、私はそう名乗った。

side out

第二夜 始まり×封絶×遮那(後書き)

タロットカードは「<http://www2.plala.or.jp/mikarinn/uranai/tarot/>」様の意味を元に、自己解釈で意味付けしています。

無印編突入時の持ち技&武器紹介

・技

・自在法 魔力を消費して発動する術。

・封絶 因果孤立空間を発生させる自在法。結界魔法と違い民間人を追い出さないが、対象者（自分・仲間・敵）以外の動きを完全に停止させる。また、転送魔法も使用できなくなる。

・修復 封絶内のものを完全に修復する自在法。対象者以外の封絶展開前に生きている生物が封絶内で死んだ場合も修復する。但し、後者の発動の為に、周辺の建物の存在の力が必要になる。

・未来予知 未来の事象をタロット占いという形で表すことができる自在法。外れることは万に一つしかあり得ない。

・清めの炎 対象者を炎で包み清潔な状態に戻す自在法。酔いなども醒ますことが出来る。

・トーチ 「存在の力」を引き剥がした建物の代わりに置く代替物。

・武器

・『贄殿遮那』 鈴音の身長と同じ長さを持つ大太刀。絶対に破壊されず、刃毀れしない。

・945 デイバイダー944ケーニツヒ・リアクデットと同型のデイバイザー。性能、姿、リアクト方法共に変化なし。今編は使用する予定なし。

・719 デイバイダー718リアクデットと同型のデイバイザ
I。姿とリアクト方法は変化ないが、二連装ガトリングガンは実弾
から魔力弾に変更となっており、ミサイルも魔力結晶をそのまま発
射する方法になっている。今編は使用する予定なし。

第三夜 戦闘×存在×夢の中(前書き)

グロ入りまーす。

第三夜 戦闘×存在×夢の中

side 鈴音？

「炎髪灼眼の……討ち手？」

「ねえ、鈴音ちゃんでしょ！？　なのになんでそんな嘔吐くのかな
！？」

今の私は『鈴音』じゃないってのに、なんで納得しないのこいつは
？　あつちは再生し始めてるし……ああ、もう！　いい加減戦闘の
邪魔！！

「ねえ、すず」「うるさいうるさいうるさい！」「…え…？」

よし。こいつが硬直している間に……

「おい、その小動物」

「は、はい！」

殺気を混ぜた視線を物体に向けながら、フェレットにどすの利いた
声で聞いたです。

「あれを止める方法はあるの？」

「えっと……あの中にある宝石、『ジュエルシード』を封印すれば
止まります」

「封印……」

『鈴音』は封印の自在式を組んでないから無理。だから……

「ごめん、私には無理。時間稼ぎをするから、そいつと協力してなんとかして」

「わ、分かりました！」

返答が聞こえたと同時に、私は贔殿遮那に紅蓮の炎を纏わせて踏み込む。物体も再生が完了して、奇声を上げながら私に襲いかかる。でも…

「遅い！」

接近していた爪ごと私は左に切り上げ、体を回転させて今度は袈裟に切り抜けた。……ん？　なんか変な手ごたえがしたけど？

次の瞬間、私の背後で桃色の光が満ち溢れた。そしてその光が消えると、服が変わって先端に赤い宝石が埋め込まれたメカメカしい杖を持ったあいつが居た。

「ふええええっ！？　一体どうなっちゃったの！？」

「落ち着いて！　それで、心の中に浮かんだ言葉を言って！」

「そんなこと言われも、早くして！」…で、でも！」

「死にたいの！？」

私が叫ぶと、あいつは怯えながら直ぐに目を閉じた。そんなことをやっている間にも、物体の再生は止まらない。私はとりあえず一発『炎弾』をこれに撃ちこんでまた散らせた。そうしてると…

「リリカル・マジカル！」

あいつが呪文を唱えた。

「封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード！」

「ジュエルシード、封印！」

《Sealing mode・Set up》

英語の音が聞こえたと同時にあの杖から桃色に光る翼が出た。そして赤い宝石から出た桃色のリボンで目の前にいる、ある程度再生した物体を縛り上げた。これは奇声を上げて抵抗するが、縛られているためまったく動けてない。

《Sealing》

また声が聞こえると、黒い物体は消えて、その場に青い菱形の宝石が残った。

(……………こういう意味なのか)

あいつが回収しようとしているの同時に、私は『鈴音』が引いたタロットの意味を思い出していた。

『タワーの正位置』、『金貨の？の逆位置』、『魔術師の正位置』

……

(予想外の事態に巻き込まれ、危険な出会いがある…か) 「あの…」
考え事をしていると、フェレットが話しかけてきた。

「何？」

「実は僕にky「きゃあああああつ！」…なのは!？」

急にあいつの叫び声が聞こえた。フェレットがあいつの元に駆け寄

る。

「どうしたの!?!」

「あ…あれ…」

「あれ?」

指さした方を見ると其処には、真っ二つに切れて腸をぶちまけた犬だったものがあつた。

「さっきの手ごたえはこれだったのね」

「なんで落ち着いているんですか!?!」

「待ってて。すぐ直すから」

私はそう言つと贅殿遮那を夜笠にしまつて、右手の人差指で天を指した。そうして、修復の自在法を発動させる。

指先が光ると、周りの戦闘痕が病院らしきところ以外みるみる修復されていく。そして、壊れたブロック塀の“存在の力”を使って犬や他の壊れたところを直した。

直し終わると、胃の中のものを戻していたこいつを放置して、私は足早に立ち去つた。そして、人目がない所で……

「封絶解除……後は任せたわよ、鈴音」

姿が変わると共に、私の意識は深淵に沈んで行つた。

「……あれ? 私、今まで何を?」

気が付いてみると封絶が消えてるし……一体どうなつてるの!?!?

「……とにかく家に帰ろつと」

ユキちゃんに聞けばわかるかな？

時は深夜。私はさっきの出来事のこと気がなって寝れずにいた。

「一体：何が起きたんだろう？」

封絶を張った瞬間から意識が無くなって、気が付いてみたら手に変な感触が残ってたし……ああ、もう！ 訳がわからない！！ ユキちゃんは『夢を見れば解るわ』……とか意味不明なこと言ってたし！
……意地でも寝よう。絶対に寝てやる！

s i d e o u t

第三夜 戦闘×存在×夢の中（後書き）

ギャラリー様、感想ありがとうございます。

4 / 9 変更しました。

第四夜 人格×激痛×神器（前書き）

全編ギャグパートです。あと『夢喰いメリー』ネタが出ます。

第四夜 人格×激痛×神器

side 鈴音

「……ここは、教室？」

私は気が付くと、世界が緋色の教室の中にいた。……拉致された？でも、嚴重な月村家のセキュリティ（ガトリング砲台などを）を突破できるわけないか。……あれ、なんか見覚えがある。まさか此処って……

「御崎、高校？」

「そうよ。そして、私と鈴音が直接会える唯一の場所よ」
「!？」

突然くぎみーボイスが聞こえて、周りの警戒を始める。すると、いきなり黒板側のドアが開いた。其処から出てきたのは……

「えっ？」

「初めまして、ね。鈴音」
「シヤナ、ちゃん？」

炎髪灼眼に変わってるシヤナちゃんらしき人が出てきた。ちょっと待って、ここって夢だよね？ と言うことは……

「あなた…もしかして夢魔？」

……あ、机巻き込んで盛大にこけた。うわ、痛そー。

「ちっが う！ 私をそんな奴らと一緒にしないで！！」

「え、夢魔じゃないなら一体何？」

「……もう夜のこと覚えてないの？」

夜のことって……封絶が勝手に解けてたあれ？ それがどうしたの？

「あの戦闘の時、この体を使っていたのは私なの」

「私の体乗っ取ってたわけ？……やっぱり夢魔なんじゃ……」

「違うわよ！！」

「冗談冗談」

私が笑うと、もう一人の私は剥れた顔になった。……シヤナちゃん
の剥れた顔って、リアルで見るとこんなに可愛いんだ。やばい、お
持ち帰りしたい。

「察するに、あなたはもう一人の私……で、OK？」

「……解ってるじゃない。じゃあ、なんでふざけたの？」

だって……ねえ？

「怒ってる顔が可愛くてつい……って、うわ！？」

悪寒がしてバツクステップした刹那、私の目と鼻の先を贅殿遮那の
切っ先が通過した。それを持っている私は怒り心頭のようだ。……こ
れ、もしかしなくてもヤバい？

「ちよっ……何するの！？」

「うるさいうるさいうるさい！ 黙って私に切られなさい！！」

「何その無茶振り！？ って、うわわわわ！！」

三時間後…

「はあ…はあ…はあ…」

傷だらけの教室（壁や床、黒板に切り傷多数。机のほとんどが原形を留めていない）で、私たちは疲れて寝転がってる。うう、怖かったよ。（自業自得だ。by作者）

キーンコーンカーンコーン

突然予鈴が聞こえた。え、今度は何が起きるの？

「……夢から覚める合図よ」

はい？ ……つてあれ、声が出ない!?

「目が覚めたら机の上にコキユートスが置いてあるわ。絶対に忘れずに身に付けるのよ？ 身に付けなかつたら殺すから」

りよ、了解!! ……つて、うわわ!?

ゴンッ!!

「ッ~~~~~!!!」

一瞬視界が真っ暗になって目が覚めたと思ったら、いきなり脳天に強い衝撃が来て私は声にならない悲鳴を上げる。

ガチャッ

「鈴音？　なんかすごい音が聞こえたけど……って、どうしたの！？」
「す、すずか……助けて」

激痛で動けない私は、涙声ですずかに助けを求めしか出来なかった。……それにしても、痛い（涙目）。

スクールバスの中　08:00

「あはははははははっ！！　は、はひっ……く、苦しい」

「酸欠になるまで笑わないでよアリサ！（涙目）」

今朝の珍騒動が原因で頭に氷嚢を乗っけて登校した私は、それを心配したアリサに大笑いされています。うう、みんなからの視線が気になるー。

「だ……だって、ベットから落っこちて頭強打するなんて……心配して損したわ」

「本当に大丈夫？　頭に凄いたんこぶ出来たけど……」

「ようやく痛みも引いてきたから、なんとか大丈夫」

頭から氷嚢を除けて自分のカバンの中にしまう。すると、アリサは私の胸の方に視線を向ける。

「ねえ。さつきから気になってたんだけど、なんでペンダントなんてかけてきたのよ？」

アリサが言うように、今私の胸の所には銀の鎖に繋いだ黒い球に、交差する金のリングで結んだ意匠のペンダント　神器『コキユートス』がかかっている。夢の中に出てきた私に『身に付けなきゃ殺す』って脅されたけど……何も起きないよ？

《私がかけて来いって言ったからよ》

「え、そうなの？」

「私は何も喋ってないわよ！」

そう言えばアリサもくぎみーボイスだっけ……って、ちっがう！

『ちよっと、どういう訳！？』

『鈴音が起きている間は、これを通して会話することが出来るのよ。』

Do you understand? 『

それは分かったけど、白昼堂々普通に発言するのは止めて！せめてこれで会話してくれますか！？』

『分かったわよ。それじゃあ説明しましょうか、私が一体何なのかね』

Side out

第四夜 人格×激痛×神器（後書き）

二重人格者にしてみました。

ここで、アンケートを取ります。天破壊砕は使ったほうが良いか否かです。もつとも、アラストールを顕現させるのは無理です。期間は4/17までです。

R a i N様、ギャラリー様、御感想ありがとうございます

第五夜 発動：第二のジュエルシード（前書き）

今回から、東京アンダーグラウンド風の次回予告も混じります。
それと鈴音視線の場合、sideは書きません。

第五夜 発動：第二のジュエルシード

『……つまりシャナの人格が生まれたのは、ユキちゃんが楽するた
め……で、OK?』

『だいたい合ってるわ。正確にはルーンと新婚旅行がしたいから、
だけど』

『あははは、自由だね』

授業中にシャナ（名前が無いって言ったから、シャナちゃんに似て
るからそう付けました。……そこ、安直とか言わない!!）の説明
を受けた結果、解ったことは五つ……

- 1：ユキはルーンと結婚して、現在新婚旅行に出てる。
- 2：封絶を張った場合、人格がシャナに切り替わる。その時私自身
は、コキユートスから自在法を使つての援護が可能。
- 3：「真紅」などは使えない。「紅蓮の双翼」「紅蓮の大太刀」は
発動可能。
- 4：夜笠の中に宝具が入ってる。
- 5：夜笠の制御権はシャナが持つてる。

1番5番はどうでもいいけど、2番3番は結構重要だね。デイバイ
ダの訓練が堂々と出来ない今は、自在師として戦うしかないから
これは結構ありがたい。でも、4番が意味不明なんですけど。

『夜笠の中の宝具って、何があるの?』

『量が多すぎて贄殿遮那以外解らない。ただ、“狩人”と“愛染自
”、“駆掠の礫”が持つてた宝具は全部あるって言つてた』

『はいっ!?!?』

ちよつと待った！ ソラトやカシヤはまだ良いとして、フリアグネの宝具つて全部分かつてないはずだよね！？ 使い方解らないから！！ まあ、とりあえず……

『よし、シヤナ。レギュラーシャープとバブルルート、アズユールは出しといて』

『分かった、ポケットに伝送しとく』

『ありがと』

……さーて、封印の自在式は組んだから、逃走用の自在式も組まないかね。えーと確か……

時は進んで放課後。なのはから『話したいことがある』と言われて、すずかとアリサと別れたあと高町家に向かつてただけ……

「なんでこんなときにジュエルシールドが発動するのよー！」

「そんなこと私に言われても〜！」

……と言う訳で、現在猛ダツシユ中です。あれ、そう言えば……

『シヤナ。なのはの武器つてどんな形？』

『メカメカしい杖だった。おそらくレンジは中から遠距離』

『シヤナは近距離型だから、相性は良いね』

『うん。ふう〜』なのは！ こっち！「……あの階段登っている最中にかけてよっ〜」

『だね』

フレットと合流して、目の前にある神社へと続く階段を一足飛びで移動する。そして頂上が見えたところで……

「封絶！」

トリガーワードを唱えた瞬間、私の意識は沈み……
……私の意識は浮上した。その瞬間、私の姿は緋色の世界の中で紅蓮の炎に包まれ、炎髪灼眼へ変わる。

「にやつ！？」「え！？」

一人と一匹が驚いた声を無視して、階段を登りきると其処に四つ目の狼（？）がいた。あれ、なんか昨日と違うけど……？

「原生生物を取り込んでる。実体を持つてるから昨日のより手ごわいよ！　なのは、レイジングハートの起動を！」

「へっ？　起動って何だっけ？」

高町が発した気の抜けた声は無視。唸り声を上げて接近してくる敵に対して、私は夜笠から贔殿遮那を抜いて正眼に構え抜き胴の要領でカウンターを決めて右足を切り落とす。序に左手から神経断裂効果を付与した『炎弾』を打ち込み、それは敵の胴体に命中した。

「ふえ……凄い」

「なのは、呆けてないで早くレイジングハートを起動させて！」

敵はゆっくりと起き上ろうとしている。……高町はあてにならないね。鈴音！

《解ってる》

鈴音がそう言うと、贄殿遮那の刀身に青い文字が一瞬浮かび上がった。私はそれを確認して敵に向かって踏み込み、距離を一瞬でゼロにする。そして、敵の胴体に贄殿遮那の刀身を深く衝き立てた。耳障りな叫びが緋色の世界に響き渡る。私はそれを無視して……

「…解放」

トリガーを引く。刹那、刀身から浮かび上がった青い光が胴体に打ち込まれ、相手は青い炎に包まれた。

しばらくたって断末魔の叫びと炎が消えると、足元に青い宝石と血まみれの子犬が残った。

「……凄い」

「ううゝ…役に立てなかった」

とりあえず足元の宝石を今更杖を装備している高町に放り投げる。フェレットはそれを一瞥してこっちに近づいてきた。そして足元の子犬を見つめる。

「酷い……直せますか？」

「楽勝よ」

夜笠に贄殿遮那をしまつて、子犬を紅蓮の炎に包みこむ。

「な、何やって「……」って、え!？」

炎が消えると子犬はきれいな状態に戻り、近くで気絶している飼い主の元に戻る。フェレットはそれを呆然と見送る。

「い、今のは……？」

「『清めの炎』。対象者を清潔な状態に戻せる自在法よ」

「へ……って、自在法？」

「説明するわよ……鈴音が」

《私かい！ 貴女も説明しなさいよ！！》
「嫌」

《……即答かい》

第五夜 発動：第二のジュエルシード（後書き）

宝具のアイデア募集します。

現時点の鈴音&キャラ解説？

・月村 鈴音

・炎の色 青色

・シャナに才能を奪われたため、封絶内の行動及び『炎髪灼眼の討ち手』に縁がある自在法が使用不可になっている。ただし自在法の才能に関しては枷が外れたため、“螺旋の風琴”並みの才能が解放された。

・追加スキル名 宝具の担い手

・効果 初見の宝具でも使いこなせるスキル。副次効果として武器の扱いがうまくなる。ただしそれ相応の訓練が必要（と言っても、上達スピードが異常に早い）。

・名前 シャナ

・姿 炎髪灼眼状態の鈴音

・炎の色 紅蓮

・鈴音の中にあるもう一つの人格。普段は鈴音の首に掛かっている『コキユートス』から意思表示をしており、封絶が張られると表に出て来る。

家族以外の人間は名字で呼ぶ。

『炎髪灼眼の討ち手』の才能を完全に引き継いでいるため、鈴音の炎の色は青に変わっている。

現時点の鈴音&キヤラ解説？（後書き）

次回、御神との邂逅です。

第六夜 御神×生還者（サバイバー）×驚愕（前書き）

SAOの要素を入れたらグダグダになってしまいました。すいませ
ん。

第六夜 御神×生還者（サバイバー）×驚愕

第二のジュエルシードを回収した後、飼い主さんの記憶を操作して私たちは本来の目的地　なのはの実家へ向かった。その道中……

『……それにしても、あなた方はいったい何者なんですか？　自在法とは一体？』

『しつこいよ、フェレット君』

念話でそう言った後、制服のポケットからタロットを一枚取り出してフェレットに見せる。見せたのは『愚者』の逆位置。意味は……

『……今はまだ話すタイミングじゃない。そう言うことですか？』
『そゆこと。子供が危ないことをしているんだったら、ここに報告しないとね』

そう言つてタロットを裏返して今度は『隠者』の正位置を見せる。意味は『年上』、つまり……

『親御さんに報告する気ですか！？』

『私はやつてるしね……お。着いたみたいだよ』

見えてきたのは木造の道場がある家……高町家にご到着つと。

『でも、高町家の皆さんとリアルに会うのは初めてなんだよね』

『なんでよ？　高町と交流があるなら面識ぐらいあるはずでしょ』

『高町家自体と私って交流ないのよ。家に閉じこもっていたし、ダイブしてたせいだね』

『…なるほど』

内部回線で会話している間に、なのはが家のインターホンを押していた。応対していたのは若い女の声で、しばらく経つと玄関が開いた。

「おかえりー、なのは！」

出た来たのは車椅子に座った、黒髪を三つ編みにしている眼鏡をかけた女の人。…つて、ちょい待ち。こ、この人つて…

「ただいま、お姉ちゃん！」

「ユーノくんも」

「キュツ」

そこまで言つてこっちを見た彼女も、私と同じように固まった。なのはが何か話しているけど一切耳に入つてこない。

「あああああああああああつー！」

「ミサトさん!？」

「ヘカテーちゃん!？」

「…なんでここにいますか(いるの)!!？」

二人同時に叫び出した。…あははは、世界つて狭いなー。生還者サバイバーがこんな近くにいたとはね。

「まったく、少しは周りのことを考えないか！」

「「うう、ごめんなさい」」

玄関先で騒いだ所を、引き揚げてきた他の高町家の面々に発見されて、現在リビングでなのはお兄さん　　恭也さんに怒られて、今解放されました。

「しかし、刀剣マニアのミサトさんが生き残っていたとはね」

「それはこつちの台詞よ。最後に会ったのは何処だっけ？」

「確か……七十層の町辺りじゃありませんか？」

私とさつきまで一緒に怒られていた隣にいるミサトこと、高町美由希さんは一夜と二夜の間の空白期に起きた事件からの生還者である。事件はあるゲームを天才　茅場晶彦が開発したことに始まる。そのゲームの名は『ソードアート・オンライン』^{V.R}　通称SAO。ナーブギアと言うフルダイブ機器を使った仮想MMORPGで、浮遊城アインクラッドの最上層攻略を目指すゲームである。二年前のあの日、そのゲームに一人のプレイヤーが閉じ込められ、殺られた瞬間現実世界からも永久退場してしまうデスゲームが始まった。結果はキリトがGM　聖騎士ヒースクリフを倒して終わり。私は夜の一族だったから筋力の衰退は無かったけど…

「でも、美由希さん。足大丈夫ですか？」

「何とかリハビリは続けてる。けど、また一から修業し直したよ」

…ほとんどのプレイヤーはリハビリ生活を余儀なくされているのが現状。現に苦笑いを浮かべた美由希さんは車椅子生活を余儀なくされている。

「でも、今日はいったいどうしたんだい？ 美由希に会いに来たわけではないんだろう？」

私に声をかけてきたのはこの大黒柱にして『翠屋』のマスターである、高町士郎さんである。

「実は…紹介したい人がいて」

「……？ 何処にいるの？」

頭に？を浮かべた桃子さんを見ながら、私は右手の指を鳴らす。

パチン

その瞬間リビングにいた全員が、緋色の世界の教室に飛ばされた。私たち以外が驚愕の表情を浮かべる中、なのはが私の隣にいる人に気付いた。

「あ、あれ？ 鈴音ちゃんが二人いるよ？」

その声に全員こつちを向く。士郎さんと恭也さんは急に表れた人物に警戒を示す。

「貴様、何者だ？」

「シヤナ。鈴音のもう一つの人格よ」

その言葉に全員が固まる。

「……すまん、もう一度言ってくれるか？」

「だから、鈴音のもう一つの人格よ」

『はあああああああああああああああああああつ！？』

•
•
•
•
•

第七夜 白昼夢(デイドリーム) × 自在法 × 解説(前書き)

題名通り、この話内の自在法の解説が出ます。

グダグダ&無理やりです。

なお、ギリシヤ語は『ここに記すことは禁術とする』と書いてます。

第七夜 白昼夢（デイドリーム）×自在法×解説

衝撃の自己紹介の後、なのはが危ないことに首突っ込んでいることを説明したら……とりあえず、心が広い家族だったと言っておく）ユーノくんが士郎さんと恭也さんに殺し屋の目で睨まれてたけど。さて…

「そっちの説明は終わったみたいだから、今度はこっちの番ね」

「その前にここが何処なのか説明して下さい。あなた方が戦う時に使う結界の中みたいですけど……」

フレット形態から人間になったユーノくんが疑いのまなざしでこっちを見る。どこって言われても……あ、良い言葉があった。

「ここは白昼夢^{デイドリーム}。……夢の中の世界よ」

「夢!? そんなバカなこと……」

「ユーノくん、ありえないことなんてありえないのよ。そんなことを言ったら魔法だってありえないことになるよ?」

ユーノくんは小さく唸って黙った。さて…と

「まずこの世界には、魔力以外にも三つ『力』が存在します」

「……三つ?」「」「」

「まず一つ目は、恭也さんが無意識の内に使っている体の中に宿る力 『気』」

恭也さんに視線を移しながらそう言うと、恭也さんは目を見開いた。

やっぱり実感できない見たいだね。

「二つ目は、大気に充ちる力を精神と術式で従わせて使う 『も
う一つの魔力』」

……だったはず。ネギま11巻の内容だからあんまり良く覚えてな
いのよねー。

「最後は、万物が存在するのに必要な力 『存在の力』」

「……最後だけそのまんまなんだね」

美由希さん、突っ込んだら負けです。私も原作読んだ時からそう思
ってましたから。私は咳払いをして話を続ける。

「と、とにかく……後者二つの力を用いて扱うのが私たちが使う力
『自在法』です。これは『在り得ぬ不思議を現出させる術』の
総称で、才能さえあれば、翻訳する術やタロット占いが必ず的中す
る術まで組み立てられます」

全員が目を見開く。……月村家の禁書庫に自在法に関する古い文献
(著者リヤナンシ)があったのは吃驚したよな。けど、最初の
一文にギリシャ語でこう書かれていた。『
?
?
?

『…つまり、

「ですが禁術とされてきました」

聞いている一部の頭に？が浮かぶ(なのはと美由希さんはスチーム
が出てるが)。

「何で？ 聞いている限り相当便利な術だね」
「リスクがでか過ぎるのよ」

説明が始まってから今まで黙っていたシャナが口を開いた。私以外の視線がシャナに集中する。

「自在法は本来『存在の力』のみを使用する術で、使いすぎてこれが無くなると……」

「……無くなると？」

一拍置いてから、シャナが重い口を開いて説明する。

この世に最初から存在しなかったことになる。

途端に空気が重くなる。シャナはそこに「但し、私たちは『魔力』が代わりに使えるから別」と付け加えて、こっちの説明は終了……

「あ、突っ込まれる前に言っとくけど、私たちだって外部から『存在の力』を使う術式だってあるわよ」

……じゃなかった。それってどう言うこと？

「封絶内の修復よ。致命傷を負ったり壊れたりして『存在』が薄れた物は、周りから『存在の力』を与えないと回復できないの。知らなかった？」

「ちよつと待って、初耳だよ！」

「あれ、おつかしいなー。私はユキから聞いたんだけど」

「……あの野郎、肝心なところ説明し忘れてやがる」

今のんきにバカンスしているはずの白猫に対して拳を握ったのは決

して罪じゃないと思う。そんな釈然としない気持ちを抱えながら白昼夢を解く。その瞬間世界が元に戻り、高町家のリビングに戻ってきた。私は戻って来たと同時に踵を返…

ガシツ！「鈴音ちゃん！」

…せなかった。理由は、なのはが私の腕を掴んだから。

「……何？」

「お願い。力を貸してくれる？」

…協力要請か。よし…

「…わかった」

「本当!？」

なのはの顔がほころぶ。だけど私は…

「なんて言うと思った？」

「え…どうして!？」

当然ながらなのはは食いついてくる。だって…

「私に頼ったら、なのは自身は絶対成長しないよ。自分の力で何とかして。……封絶」

なのはがまたなんか言ってくる前に、私は対象を『自分』と『玄関』だけに絞って封絶を張った。当然ながらそれ以外のものは時が止まったように動きを止め、私は紅蓮の炎に包まれ……炎髪灼眼になった。でも良いの？

《何が？》

「高町に協力しなくて」

掴まれた腕を取り外しながら会話する。まあ、私としてはどちらでもいいんだけど。

《ユーノくんが乗っていた運搬船の事故が引っかかってね。黒幕と話がしたい。》

「……なるほど」

高町の腕を十分かかって取り外して、私たちは玄関を飛び出した。

第七夜 白昼夢（デイドリーム）×自在法×解説（後書き）

次回予告

なのはの協力を断った鈴音は、もう一人の収集者に出会う。

次回 灼眼の転生者 『閃光×死神×転生の式』

「私の賭けに乗りませんか？」

第八夜 閃光×死神×転生の式 前編（前書き）

長くなったので、前編をうpします。

第八夜 閃光×死神×転生の式 前編

ゴトッ

翌日の正午。私は風邪の症状を起こす自在法を組んで学校をズル休みした（忍姉さんは気付いていたけど黙認してくれた）。理由は、寝る前にやった占いの結果。なお、今回出たカードは『魔術師』と『聖杯の?』の正位置。意味は『新しい出会い』と『問題解決』。つまり…

《『新しい出会いが問題解決へと繋がる』……なんて信じられないんだけど。特に後者》

「まあ、会ってからののお楽しみみてことだね。そのために『玻璃壇』を引っ張り出してきたわけだし」

冒頭一発目の音は、銅鏡型宝具『玻璃壇』を自分の床に置いた音です。この宝具ならば、探し人を必ず見つけられるはずだからね。

「……どうやって起動させるの?」

……根拠? 出会う人物のヒントを求めてもう一度占いをした結果だよ。そのカードは…

《念じれば勝手に起動するわ》

…『星』の正位置と『杖の?』の逆位置。意味は…

「おっけ……『玻璃壇』」

…『友情』と『障害』。つまり『友の障害』。『ジュエルシードの収集者！』

「発動！」

トリガーを引くと、地鳴りと共に床が盛り上がり、私たちがいる月村家を中心に、海を含んだ『海鳴市』と隣町の『遠見市』そっくりの箱庭が形成される。私は跳び上がって月村家の庭部分に着地し炎の欠片を少し落とした。その瞬間鈍い地鳴りと共に、とある機能が発動する。すなわち、存在の力を視覚出来るようにする機能が。

「うわ…海にまで落ちてるよ」

《どうやって回収するのよ、これ》

とは言っても、人間と一際『存在の力』が大きい物体　ジュエルシードみたいなものだけだね。

《……あれ？》

海に浮かぶ菱形の六つの光点を見つめていたら、シャナが急に声を上げた。

「どしたの？」

《遠見市の高級マンションを見て》

そう言われて見てみると……ベランダに着地して部屋の中に入る人型が見えた。それと、腰のあたりで煌々と輝いてる菱形の光点も。やっぱりこれって…

《ジュエルシード。しかも移動してる…って事は》
「早速当たり引いた…のかな？」

…さて、ここからが問題だ。こういう輩は警戒心が強いと相場が決まってる（まあ、白昼堂々空飛んでいるのに警戒心どころどころもあつたもんじゃないが）。…ここはやっぱり…

《季節外れのクリスマスプレゼントでしょ？》

「…私が言おうとしてたのに」

《何言つてんの。早い者勝ちでしょ》

「はあ…ま、良いか。試してみたい自在法もあるから、テストも兼ねてやりましょうか」

テキストに理由作って外出ますか。…ああ、そうそう…禁書も忘れずにーっと

三時間後…

side アルフ

「フェイト、大丈夫？」

「…大丈夫」

回復魔法をかけられながら、苦痛にゆがめた顔で答えるのはアタシ

のマスターである、大魔導師プレシアの一人娘　フェイト・テスタロッサ。プレシアから「ジュエルシードを集める」と命令されて久々に家に帰ったら、あんのクソババア「数が少ない」だのほざきやがって、今までの間鞭でずっとフェイトのこと叩いてた。

「ねえ、フェイト。なんであんな母親に従うんだい？」

「……私の、大切な母さんだから」

「フェイトのことを大切に思っているのならあんな事はしないって！　あいつなんか、フェイトのことなんか如何でも……」

「母さんを悪く言わないで！」

急に出された大声にアタシは一瞬怯んでしまう。その隙にフェイトは立ち上がって、ハンガーに掛かっている服を着ながら口を開いた。

「母さんがあんなことするのは、私がちゃんと出来てないから怒っているだけだよ」

……本当にそうなら良いけど。まあ、なんにしても……アタシの仕事はフェイトの邪魔になる奴らをぶっ飛ばすだけだ。それがたとえ……

コンコン

そんなことを考えてると、急にカーテンのかかった窓をたたく音が聞こえてきた。……ちょっと待て、ここ十階だぞ。まさか……

「フェイト」

「うん……バルディッシュ」

《Yes sir》

電子音が聞こえた後フェイトの手が一瞬光って何かを形作った。そ

の光がはじけた後には黒い戦斧　フェイトのデバイス、バルディ
ツシユが握られていた。

それを確認して、アタシは一気にカーテンを開けた。

「……………」

開けて……………啞然とした。そこには青白い鳥が一匹居ただけだったか
ら。……………なんだ、鳥かよ。

「!?　アルフ！」

「え?……………な!？」

油断して鳥から目を離れたすきに視界が明るくなった。それに驚い
ていると、だんだんと光が収まっていつて…

「……………やっほー」

…そこに居たのは、ペンダントを掛けた黒髪の女だった

第九夜 閃光×死神×転生の式 中編

十分前……

玻璃壇を回収して散歩という名目で外に出た私たちは、あるものを回収して獣化の自在法を使って鳥に変化。そのまま目的地に向かった。

「天壤を翔る者たち」を熱唱しながら、目的地のベランダに到着。そのまま嘴を使ってカーテンのかけられた窓を突く。その数秒後、カーテンが勢いよく開けられて視界が開けた。そこに居たのは黒い斧を持った私と同じ年ぐらいの金髪の少女と、橙色の髪を持った女の子……って、

『犬耳？ コスプレかな？』

『犬が素体の使い魔よ。魔力パスが見えるから奥の彼女が主ね』

『……詳しいのね』

『ユキに叩き込まれた』

『さいですか……解除』

一瞬飛び上がって自在法を解除して、軽く挨拶。

「……やっほー」

部屋の中の二人は私を認識すると、警戒の眼差しへと変わる。

「……誰だい、アンタ」

《季節外れのサンタクローズよ》

「ここを開けてくれれば……」

そう言いながら右手をポケットに手を伸ばし、回収したあるものを指にはさんで取り出す。

「…これを、プレゼントするよ」

それを見た二人は目を見開いた。だって私の指にはさんでいるのが彼女たちの求めているもの　ジュエルシード（封印処理済み）なんだから。

「アンタ、一体どこでそれを!？」

「話は窓を開けてから」

「……解りました」

今まで黙っていた金髪の娘が口を開いて窓を開けた。私は靴を脱いで上がり、通り過ぎながら女の人にジュエルシードを渡す。

「まずは自己紹介から…私は月村鈴音。で、こっちが…」

私は胸にかけられたコキュートスを見せる。

《鈴音のもう一つの人格、シャナよ》

「……デバイスじゃないの？」

《違うわ。鈴音の中に居る私が、これを通して話をしているだけ》

「…二重人格って奴か」

「そゆこと。……こっちの自己紹介は終わり。今度はそちらの番だよ」

二人は顔を見合わせると、金髪の娘の方から話し始めた。

「私は、フェイト・テストロツサ」

「アタシはフェイトの使い魔、アルフだ」

「フェイトにアルフね。……よし、覚えたわ」

自在法を発動させて、レギュラーシャープを浮かび上がらせてカードを引く。引いたカードは『剣の?』と『女王』と『剣のキング』の正位置。意味は『悲哀』と『母』と『命令』。……つまり黒幕はフェイトの母親か。でも、悲哀って一体何？
私はそんなことを考えながらカードを戻し、

「さて、ここで交渉なんだけど、私の持つてるジュエルシード全部と引き換えに……」

またポケットに手を伸ばして、残りのジュエルシードを掴む。

「…あなた方に命令を与えてる人に会わせてくれるかな？」

数は 五個。

「……一体どうやって集めたんだい」

アルフが呆れたような声を出す（フェイトは驚きで固まっている）。実際に見せた方が良くと判断した私は、台所に移動して栓をしてから蛇口をひねり水を出す。

「海の中に在ったジュエルシード全部を……」

水がいつぱいになったのを確認すると水を止めて、左手を前に出しながらとある自在法を発動させる。すると突然私の左腕が弾けて粒子をまき散らし、水の上に降り注いだ。

「!？」

「ちよつ、何やって…」

二人の驚いてる声を無視しながら、水を操作して高密度の水の手を作り出す。

「…これですくい取って集めたんだ」

……『ヒーシの種』。「百鬼夜行」の運転手“輿隸の御者”が使う自在法で、体を分解して粒子をばら撒き触れた部分の物体を操ることが出来る。海の中に在った六つのジユエルシードはこれを使って集めた。

「さてと、どうしますか？」

私は自在法を解除して二人に問いかける。彼女らはしばらく顔を見合わせた後、フェイトの方が口を開いた。

「解りました、貴女達を母さんの所に連れて行きます」

「忠告しとくけど、怪しい動きをしたら喉笛食いちぎるよ」

「構いません」

《私もよ》

その後屋上へ移動した私たちは、フェイト達の家へ転移した。

第九夜 閃光×死神×転生の式 中編（後書き）

次回、やっと黒幕と遭遇します。

第十夜 閃光×死神×転生の式 後編

フォン

「着いたぞ」

アルフの言葉が聞こえて目を開けると…

…幾何学色の空間に浮かぶ、要塞見たいなところに立っていた。

「ここは?」

「アタシらの実家、『時の庭園』だ。ついてきな」

アルフはそう言うのと歩き出した(フェイトはさっさと先行している)。私たちは逸れないように黙ってついて行く。大体五分ぐらい歩くと、巨大な門の前に着いた。アルフに促され、私自身の手で扉を開ける。

開けた次の瞬間、紫電が飛び込んできた。

「うそっ!?!」

私は驚きつつも『炎弾』を撃ちこんで爆散させ、追撃が来る前に一気に部屋に踏み込む。部屋の中には右手に杖を持ち、紫のローブを身にまとった女性がいた。

「ちょっと何するんですか!」

「フェイト、アルフ。部屋に行きなさい」

女性は私の声を華麗に無視してフェイト達に指示を下す。青筋を浮

かべながらフェイト達が出るのを待っていると、女性は突然笑い出した。私は不可解な行動に驚いてると、女性が口を開いた。

「ごめんなさいね。知り合いに似ていたものだから、つい悪戯心で《吃驚したわよ……って、知り合い?》

「つかぬことをお聞きしますが、その知り合いのお名前は?」

「シヤナよ。あの子、元気にしているかしら」

……マジかい。つーことはこの世界って…『灼眼のシヤナ』の世界と繋がってるの!?

『シヤナ、どう言うこと!?!』

『私に聞かないでよ! 全部知っているわけじゃないんだから!』

「それで、ここに何の用かしら?」

女性は笑みを消すと、眼光を鋭くして睨んできた。私はそれに威圧されて身を竦ませながら、何とか口を開く。

「え、えーと…あなたとお話がしたくて」

《単刀直入に言っわ。ジュエルシードなんかを集めて、アンタは何をする気?》

「次元震を起こして忘れられた都『アルハザード』への道を開き、其処の技術で一人娘のアリシアを生き返らせるためよ」

シヤナの度胸ある発言に女性は即答した。……ねえシヤナ、アルハザードって何?

《次元世界の狭間に位置すると言われてる、失われた秘術が眠る地のこと。ハガレンのゲーム二作目に出てくる、シヤムシッドを思い浮かべれば大体あってるよ》

「なるほど。でも、一人娘ってフェイトちゃんのことじゃ…って！？」

私がそう口走ると、また紫電（結構強め）が飛んできた。炎弾では相殺できないと判断した私はそれを大きく左に回避する。

「あんな人形とアリシアを一緒にしないで！」

女性の声が聞こえた途端続けて紫電が連続してが飛んでくるので、心の中で悪態をつきながら回避し続ける。爆音が連続して響き渡る中、私は声を張り上げて質問する。

「人形って、一体どういうこと、ですか!？」

「フェイトはアリシアの出来そこないの人形よ！それを人形と言っって何が悪い！」

はいっ!?! 出来そこないの人形って……フェイトちゃんはアリシアちゃんのクローンとでも言いたいわけ!?!

《おそらくそれで合ってるわ。アンタ『プロジェクトF・A・T・E』を完成させたわね!》

「なにそれ…って、うわっ!?!」

シヤナに質問したと同時に、私の真ん前に紫電が着弾。この調子じゃ捌き切れないと思ったため、身体強化の自在法を使ってさらに回避し続ける。

《どっかの馬鹿が提唱したクローン技術のこと！あの子の名前って出来そこないだから、どーせキトーにプロジェクト名から取ったんでしょっよ!》

「……一様確認。クローンだけ親はこの人で合ってるよね？」
《ええ、その筈よ》

シヤナの肯定の言葉を聞き取った私は…ブチ切れた。

「ふざけんじゃ…」

ポケットの中に在る『杖の？』のカードを取り出し、魔力をカードに込めて真つ二つに破って両手に持つ。その瞬間カードが光と共に形が変わり、漆黒のガンگریップナイフと呼ばれる武器が現れる。その名も　ディバイダー719。

「ないわよ…！」

飛んできた紫電を左手の武器で左側に払って相殺し、ほぼ同時に右手のトリガーを引く。先端から放たれたエネルギー弾は女性の持っている杖に直撃し、杖は粉々に砕け散った。

「クローンだとしても、アリシアちゃんじゃないとしても、フェイトちゃんはあなたの立派な子供でしょ！　なのに…」

脳裏に浮かぶのは、転生前の世界での親友の顔。私は涙を浮かべながら叫ぶ。

「なのになんで同じように愛せないわけ…！」

「…仕方ないでしょ…！」

女性はそう言つと子供のように泣き崩れた。私は呆気にとられながらも、警戒しながら怒気を消さずに近づく。

「最初は同じように愛そうとしたわ！　けど、あの子の顔を見るとアリシアの顔が重なって……」
《それで、ちゃんと愛せなかったのね。だから心苦しくても、彼女を否定し続けてきた》

女性の言葉をシヤナが引き継ぐ。どうやらそれで合ってるらしく、女性は泣きながら頷いた。

「……そう」

719をカードに戻しながら、シヤナに禁書を夜笠から取りださせて、階段の前に置いてから踵を返す。

「その本の最後のページに、アリシアちゃんを完全に蘇らせる方法が書かれています。落ち着いたら読んで下さい。こっちは勝手に協力しますよ」

そう言うってから扉を開けて部屋を出る。

「……なんでアンタはそこまで出来るんだ？　アタシらは赤の他人の筈だろ？」

扉の前にはアルフが待っていた。言葉から考えて、ブチ切れたあたりから聞いていたらしい。私は扉を閉めながら答えた。

「……私は、家庭のいざこざで自殺した親友を知ってるからね」
「！？……すまん」

「別にいいよ。……それより、早く転移してくれる？　家長が怒り心頭になってると思うから、早く帰りたいの」

「そ、それはまずいな。よし、解った」

アルフがそう言うと、私の足元に魔法陣が展開される。

「アルフ」

「ん？」

「因果の交差点でまた会おう」

言い終わると同時に魔法陣が光り出して、瞬きした瞬間には遠見市のマンションの屋上に来ていた。

《…719。扱えてたわね》

「まぐれだよ。まぐれにしないように、もっと鍛えないとね」

《感心感心。…さて、とっとと帰ろうよ》

「うん！」

会話が終わると、私は獣化の自在法を使って鳥に変化し帰路を急いだ。

解説と言つ名の座談会

作者（以降黒）「初めまして。当小説作者、ブラックキャット黒猫と申します」（ペコリ）

鈴音（以降鈴）「当小説主人公、月村鈴音です」（ペコリ）

黒「さて、衝撃の事実が発覚しました第十夜はいかがだったでしょうか？」

鈴「プレシアさんがシャナちゃんと知り合いつて話でしょう？全然接点見当たらないんですけど……」

黒「その話は後で。とりあえず、この小説の世界観は……こちら」

世界観

・十年前に“祭礼の蛇”が大命を完遂していて、フレームヘイズが消滅している。
・当然、無何有鏡サナトウは完成しており、“徒”はそこで暮らしている。
・一部の“徒”は、“祭礼の蛇”と“探耽求究”が作り出した発明により、「存在の力」を消費せずにこの世にも存在できるようになった。が、「存在の力」を喰らうのは禁止されている。

黒「……と言つ訳」

鈴「『灼眼のシャナ』の『バル・マスケ仮装舞踏会』勝利後の世界なのね。とゆーことはあの禁書って」

黒「モチのロンで“螺旋の風琴”直筆の本だよ」

鈴「ええええええええええええええええつ！！」

黒「なお、プレシアとシャナが知り合ったのは28年前。行き倒れていたシャナを介抱したのが始まりだ」

鈴「そんなしょうもない理由で知り合ったの！？」

黒「次は鈴音の現時点での所有宝具の解説」

鈴「スル かい！？ でも重要だね。何があるの？」

黒「こちらです」

現時点の所有宝具

- ・贄殿遮那

フルトゾオガ

- ・吸血鬼

- ・火除けの指輪 アズユール

- ・バブルルート

- ・レギュラーシャープ（ユキの改造により、トランプからタロットに変化）

- ・玻璃壇

- ・コルデー

- ・腐敗怨誅

- ・ヒラルダ

- ・アタランテ

黒「……以上です」

鈴「結構あるね。でも、腐敗怨誅って何？」

黒「ギャラリー様が送ってくれた宝具だよ。詳細はこちら」

・腐敗怨誅

・小太刀型の宝具で一尺五寸（45cm程）のサイズ。

刀身が全て鉄錆になっているが非常に硬く、折れてもすぐに再構成される。

小太刀の刀身を攻撃・防御時にかかわらず受けたモノは受けた部分を中心に腐食が発生、対象を内部破壊する。

受けている間しか腐食は発生しないがその速度は凄まじく持ち主によって調節はできるが

最速だとデバイス程度なら数秒で全体に腐食をいきわたらせることが可能。

主に近接武器の使い手に対しての武器殺しや強力な再生能力を有する生物に有効。

ただし純粋なエネルギー体（魔力・炎熱・電気）相手だと腐食は起きないので相性が悪い。

また、補足ではあるが贗殿遮那のような「他」から「自」に対する干渉を無効化する。

タイプにも腐食は通じないが、「他」からの外部攻撃が通じないバブルートの場合は

内部からの腐食で破壊されるので非常に有効。

黒「……と言う訳。ギャラリー様ありがとうございます」（ペコリ）

鈴「まさに武器殺しね」

黒「さて、次回予告行くよ」

鈴「第三・第四のジュエルシードを回収した私。そして待ちに待っ

た日曜日、とあるカップルの元に悲劇が襲う！」

黒「元凶に気付いていたのはと、変身して現場に向かう鈴音。第五のジュエルシードはどちらの手に渡る？」

鈴「次回、『灼眼の転生者』。『争奪…唸る剣と少女の砲撃』」

黒「お楽しみに」

解説と言つ名の座談会（後書き）

学校が忙しくなってきたので、毎日掲載は厳しくなります。

第十一夜 争奪…唸る剣と少女の砲撃 前編（前書き）

質問があつた第三夜でのシャナの行動ですが、「生まれた直後だったため、名前がわからなかったから」…です。
後付け設定で申し訳ありません。

第十一夜 争奪…唸る剣と少女の砲撃 前編

その日の夜

「…なのはちゃん、そんなことに関わってたんだ」

「うん。あ、アリサの方にも伝えといてくれるかな。『なのはがうじうじしてたら、ガツンっと言ってくれ』って」

「ふふっ　アリサちゃんはそんなこと言わなくても、ちゃんと言ってくれると思うよ？」

忍姉さんにちよっと叱られた後、すずかの部屋に行って私に関することなどを説明。……まあ、何とか納得してもらえたと思う。

「でも鈴音。どうしてなのはちゃんじゃなくて、テストロッサさんに協力しようと思ったの？」

「うん……見ていられなくなったから、かな」

すずかの疑問に、私はつつむいて答える。

「私が転生者だったことは教えたよね？」

「うん」

「前世でね…私の親友が、家庭のいざこざで自殺したんだよ。『自分は愛されていない』……それが理由で」

名前は、篠原音羽。優しくて、誰からも愛される性格の生徒会長だった。音羽が居なくなっただけで学校中の雰囲気重くなって、すすり泣きまで聞こえてたっけ。

「親族の方を怨まなかったの？」

「そりゃ最初はね。でも、音羽が生きている時もよく会っていたけど、決して愛していなかった訳ではないんだよね」

うん、絶対にそうだ。調べたけど虐待の傷とかも無かったしね。

「愛が音羽に伝わってなかったみたい。……通夜が終わって頭が冷えて気付いた時は、激しく後悔したよ」

それがどうもあの親子に重なってね。……半分はこれが理由。

「もう半分は？」

「好奇心。理由は誰も成功したことのない術式を使うから」

私が即答すると、すずかは派手にずっこけました。え、なんで？

この後、ちよっとした協力（玻璃壇の監視）を頼んでから寝ました。

二日後

side ユーノ

「うう」。また回収できなかつた」

「なのは、大丈夫だよ。今度は回収できるって」

ジュエルシード回収……失敗の帰り道。こここの所、なのはが封印した後に何かしら起こって、ジュエルシード奪われるパターンが多い。一回目は青白い鳥に銜えられて逃げられた。今回は回収直前に、レイジングハートに金の鎖が巻きついて機能不全に陥り、呆気にとられていた隙に赤い狼が奪った。ホントに一体誰があんな事を…？

パタリ

そんなことを考えていると、突然隣を歩いていたなのはが倒れた。

「もうだめ、疲れた」

「うわ〜!?　なのは、家はもうすぐだよ!?　頼むから起きて〜
!!!」

……その前になのはを休ませないと。体力的+精神的なダメージで参っているはずだから。

side out

「……ほい、今回の分」

「お、ありがとな」

なのはとユーノが家に向かってトボトボ歩いているとは露知らず、こっちは近くの現場でアルフにジュエルシードを渡していた。

「しっかし、お前ら性格悪いな。おチビちゃんが封印した後に奪うなんて…」

アルフは苦笑いをしながらこっちを見てくる。だってしょうがないでしょ…

「こっちの封印式は直接接触しないと発動しないからね。そんなことをしたら問い詰められるのがオチだよ」

あと、昨日シャナに頼んで夜笠の中のもの全部ださせたら、いろん

なものが出てきたから宝具のテストも兼ねてね。それに訳解んないスキルが追加されてるから、そののならし運用も計画に含めてる。名前は、たしか『宝具の担い手』。それに……

《高町を精神的に疲れさせるのも作戦の内だしね》

「…お前ら、やっぱ性格悪いって。なんでごく普通に黒い笑み浮かべてんだよ」

《「気のせいだって(でしょ)」》

「アタシが断言する。絶対気のせいじゃねえって!!」

P i P i P i P i P i P i P i

アルフが突っ込み終わったすぐ後に着信音が鳴り響く。勿論アルフは通信機器を持ってない。

「あ、失礼」

ポケットから紅蓮に染まった栞を取り出し、魔力を流し光らせてから通話させる。

「『鈴音。なのはちゃんが家に入ったよ』」

「了解。もうすぐ帰るよ」

「『うん、待ってるよ』」

……通信終了つと。私はポケットにしまいながら、アルフに話しかける。

「フェイトの傷の具合はどう?」

「明後日には完治するはずだ」

《……もうすぐね》

「ああ、そうだな」

「……………それじゃあ、またね」

「気取られないように注意しろよ！」

「解ってるよ」

私は獣化の自在法、アルフは転送魔法を使って帰路を急ぐ。

……………現在のジュエルシード回収状況は、なのは&ユーノが三個、こっちは十一個、残りは七個。しかも残りの位置は把握してるけど回収しようにも回収できない。なお、原因はなのはたちが持っている三個のジュエルシード。なのははともかく、ユーノがジュエルシードを平和的に渡してくれるとは思えないから、お互いのジュエルシードを賭けて勝負するしかないんだけど……………私とシャナは面が割れてるし…

「こんなときにフェイトが戦闘不能とわね」

《しょうがないよ。回復魔法の掛け過ぎは体に毒だから》

…てな訳で、回収しようにも回収できない状況に陥った。……………ちなみに、アルフから『賭け野試合をする』って案も出たけど、私が却下した。精神的にはともかく、肉体的疲労が重なって大怪我したら洒落にならない。そんなことになったら、私が恭也さんたちに殺されかねないしね。

第十一夜 争奪…唸る剣と少女の砲撃 前編（後書き）

4 / 21 変更しました。

第十二夜 争奪…唸る剣と少女の砲撃 後編（前書き）

最後のあたりがグダグダ……申し訳ありません。

第十二夜 争奪…唸る剣と少女の砲撃 後編

翌日、日曜日。今日は土郎さんがコーチ兼オーナーをしているサッカーチーム『翠屋JFC』の試合の日。現在目の前でかなりレベルが高い試合が展開されています。

『…シヤナ、見つかった？』

『だめ、もうちょっと掛かる』

ただこっちはゆっくりしている時間も惜しいから、右目に眼帯付けて瞳の奥で探査の自在式を発動させてる（眼帯のことは当然ながら二人に突っ込まれたけど、『瞼の上を切った』と嘘吐いた）。……これには理由があるのよ。朝の六時頃にふと玻璃壇を見たら、ジユエルシードの反応が人の反応と共に翠屋方向に動いていたから、『サッカーチームの誰かが持つてる筈』と踏んだわけ。その後家族に事情を説明して、眼帯を付けて現在に至る。

『…あった』

『よし、今すぐ回収に』

『行かないで』

立ち上がるうとした瞬間にシヤナに止められてずっこけそうになる。とりあえずその場はトイレに行くことと誤魔化して移動した。

『ちよつと回収するなってどう言う訳!？』

『それでもし発動されたらどうするの？ 問い詰められて協力させられたら、テストロッサの信用を失うことになるよ』

『……あ』

すっかり失念してたわ。サンキュー、シヤナ。

『良いよ別に。それに……』

あれ、なんでだろう。白昼夢入ってないのに、シヤナが黒い笑みを浮かべてるのが見える。

『…これを利用すれば……』

シヤナが発した言葉は衝撃的で、なのは道を左右するものだった。

時は進んで昼過ぎ。サッカーは翠屋JFCの勝利で終わり、慰労会を兼ねて翠屋で食事が開かれた。……場違いな私たち四人娘も外で食事していましたけどね。で、それが終わって一息ついたらジユエルシードが発動。現在、サーチ無効&気配遮断の自在法を使用しながら結界内ただいま侵入……成功。

「……………うわ」

《こりゃ酷いね》

入った瞬間に見えた光景は、道路を埋め尽くす一面の木の根。私はこの光景に絶句しながらも、右目の奥で探査の自在法を走らせる。……三百m先になのは発見。でも……

《目の前の奴を切り払わないとたどり着けないね》

「うん…こいつのテストの兼ねて、切り払いながら進もう」

そう言いながら左手でポケットから『剣の騎士』のカードを取り出して丸め、それを両手で引き伸ばす。そうすると、光と共にカードが漆黒の鞘へと姿を変える。……って

「鞘だけ!? え、刀は何処行つたの!？」

《……もしかして、夜笠の中?》

「え? いやいや、そんなはずは……」

《権限はそつちに譲渡してあるから、とにかく展開してみて》

「う、うん」

鞘を左手に持ち替えてから言われるままに夜笠を展開し、右手を内側に入れて刀の柄を顕現して掴んで引き抜く。現れたのは純白の太刀。デイバイダー945。……てーか、ホントにあったよ。一体なんで?

《考えてる暇ないよ》

「え?」

《サーチャーの探す範囲がドンドン狭まってる。このままだと……》
「間に合わなくなる、か。……だったら」

言葉と共に消音及び視覚妨害及び風圧吸収の自在法を周囲に展開して、945を鞘に納めて腰を落とす。

《ちょ、何する気?》

「面倒だから前方一面吹き飛ばす!」

945に魔力を纏わせて限界まで圧縮する。それを抜刀しつつ…

「虚空……」

…横薙ぎに振るいながら解放する！

「…一閃！」

945から放たれた斬撃は、前方の木の根を全部吹き飛ばした。消音の自在法張ってなかったら、辺りに爆音が鳴り響いていたであろう。けど……

「……シヤナ、何かがはじけ飛んだような感じがしたけど？」

《正解よ。あの攻撃でサーチャーが一個吹っ飛んだわ》

「…もしかしなくてもやり過ぎた？」

《そうね。その所為でユーノが接近してきてるよ》

「マジで！？ あゝ、もう失敗した〜！！」

《悔やんでも仕方ないよ。で、どうするの！？》

「地駛ちしり使って逃げる！」

《ちょ、回収妨害はどうする気よ！？》

「アタランテを使う！ 手元に出しといて！」

私たちは言い争いながらも“坤典の隧”が得意とする自在法、地駛を使って地面に大穴開けて逃走した。

side ユーノ

「……何があったのこい」

ついさつき、サーチャーの反応がこの近辺で途切れたから確認しに来たけど……木の根は全部吹っ飛んでるし、地面に大穴開いてるしで、ここだけに隕石が落ちたような感じだった。

『ユーノくん。どうだった？』

『……ここだけ滅茶苦茶になってる。なのは、そっちはどう？』

『ジュエルシードを見つけたよ。ここから封印する！』

『って、其処からじゃ無理だよ！ 深くに行かないと！』

『出来るよ！』

そう言うと向こうから念話は切れた。僕はなのはの頑固さに頭を抱えながらも、なのはの元へ急いで走りだす。でも数分後、なのはは自分の言ったことを現実にした。だって、桃色の閃光が木の幹に向かって一直線に伸びていったから。

「砲撃……魔法に触れてから一週間もたつてないのに……」

……なのはの魔法技術は舌を巻くばかりだ。本当に魔法に触れてから一週間もたつてないのに、集束系の上位魔法や砲撃までやってしまっただから。

『封印……成功！ って、あれ？』

『なのは、どうしたの？』

『なんか、大きいシャボン玉がこっちに向かって来て……にやあっ！』

『なのは？ なのは！？』

急に大声が聞こえて念話が途切れた。ああ、もう！ 今度は何があったの！？

side out

「回収妨害成功」

《冷や冷やさせないでよ。まったくもう》

アタランテから出たシャボン玉がなのはに着弾したのを確認したのち、ジユエルシードを強奪してから鳥に変化してアルフとの合流ポイントに向かう。で、今はその道中。でも…ホントに良かったのかな？

《何が？》

「今回の件で、なのはが魔法に恐れを抱いただろう…」

朝にシャナが提案した案は、『なのはに魔法に対して恐れを植え付ける』と言うものだった。たしかに、なのは自分のミスであのカッブルを傷付けた。そして、その原因は自分が使っている魔法。…昔の私だったら、自分の力に恐れを抱いて捨てて逃げ出していた。それはおそらく、まだ逃げ出すまでは行かなくても、なのはも同じなはず。でも……

「…もしそれを乗り越えたらどうするの？」

『自分の剣に怯えぬ者に剣を握る資格は無い』……そう言う風に某九番隊長が言っていたしね。だからもしなのはが恐れを乗り越えたら、それは強大な壁となって私たちに立ちふさがるはず。

《そんな時はそんな時よ。どーせ私たちは、この後もう戦うことはないだろうし》

「……まさか、フェイトちゃんの成長の糧にしよったの？」
《そのまさかよ。ふふっ、楽しみだわ》

……何か釈然としない感じを抱えながら、私たちは合流ポイントまで一直線に移動した。

第十二夜 争奪…唸る剣と少女の砲撃 後編（後書き）

いつの間にか三万PV突破。

読者のみなさん！ ありがとうございます…！

第十三夜 温泉×見学×大鎌

七日後の日曜日（連休）。私たちは高町家の家族旅行に同行させて貰って、現在公道をなぜか夜笠の中に入っていたA・Tを^{エアトレック}装備して車を追っています。なお、走っているのは公道です。

『…そう言えば、テストロッサに連絡入れたの？』

ここからは外に漏れちゃ不味い会話なので、念話に切り替える。

『勿論入れたよ。ただ、一緒に怒られたけどね』

『あゝ、あれね』

怒られたというのは、庭先に落ちていたジュエルシードを回収し忘れて、おまけに発動させてしまったからです。あははは、足元で光つっても気付かないって。まあ、結果的にフェイトが邪魔して事無きを得ただけ。

……そんなことを考えてると、だんだん旅館が見えてきた。

『結構でかい旅館ね』

『そつだね〜……よつと』

駐車場が近くなってきたから、私はA・Tの加速を止めてパワースライド使って急停止。

『おお〜〜！』

…急に周りが拍手喝采。え、別に大したことしてないよね？

「何が『大したことしてない』よ！ あんな見事な技見せられたら、誰だって拍手ぐらいするわよ！」

「ねえ、それ私にも出来るかな!？」

「少なくとも運動神経焼き切れてるなには無理」

「にやつ!？ 鈴音ちゃん酷いよ!！」

「本当の事なんだから諦めなさいよなのは」

「アリサちゃんまで酷いよ!！」

まあそんなのははほつといて、温泉にレッツゴー！

『…………張り切ってるわね』

シヤナが呆れたような声を出すけど気にしない。だって温泉入るの
久々なんだもん

カコーン

「ふう、極楽極楽」

《…………ねえ、何時まで入っている気？ もう四十分経ったよ》

「良いじゃん。九年ぶりの温泉なんだし」

騒々しいなのはたちが上がってから、私はゆっくりと温泉を楽しむ。
ちなみに今現在、コキユートスの形状をイヤークラスに変化させて
装備している。

ガララッ

温泉を楽しんでいると突然脱衣所のドアが開き、橙色の髪の女の人が入って来た。

「あ、アルフ」

《アンタも温泉を楽しみに来たわけ？》

「まあね。フェイトがジュエルシード探してる間だけだけど」

「え？ って、あ。そう言えばあそこ川だっけ」

玻璃壇を最後に見たのは…確か三日前。 ……それだけあったら流されてもおかしくないか。

チャプ

そんなことを考えてると、アルフが隣に入って来た。

「…………ふう、確かにこりゃ極楽だわ」

「でしょ？」

《だけど調子に乗って、後三十分ぐらい追加で入るのは勘弁して。

私もうのぼせそうなのよ》

「え？ だめなの？」

《本気でやる気だったわけ！？ 勘弁して〜！！》

私はシャナの悲痛な叫びを聞いて、苦笑いしながらとっとと上がる
うと…

「あ、鈴音。ちょっと良いかい？」

…できなかつた。アルフに呼び止められて、私は近くの岩に腰かけ

る。

「…何？」

「今夜どうするんだい？ 動きたくても動けないだろ」

「何とかするよ。幸い、高町家とユーノ以外は私たちの味方だし」

そう言い残して温泉を出た。……………一段落したら朝風呂しようかな。

時は進んで深夜。隣の部屋で大人たちがドンチャン騒ぎをしているが、時間が時間なので仲良し四人組は就寝時間。一緒に布団で寝ることになった。けどジュエルシールドが発動したため、なのはとユーノが窓から出撃した。

《……………行ったよ》

耳元でシャナの声が聞こえたと同時に、獣化の自在法で猫になっ
て
す
ず
か
の
拘
束
か
ら
逃
れ
る
。
そ
し
て
そ
の
ま
ま
開
け
っ
ぱ
な
し
の
窓
か
ら
飛
び
降
り
て
…

スタツ

…地面に着地。それから猛ダツシユ！

『……………アルフ。こっちは外に出られた。そっちはどう？』

『今二人のガキと対峙中。なるべく急いでくれ』

『了解』

そしてその後三分ぐらい走って現場到着。近くの木に登り獣化を解いて経過を見守る。

『……あれ、アルフが居ない』

『スクライアが居ないから、一緒に強制転送魔法でぶっ飛ばされたんじゃないの?』

『納得。ユーノはサポート系得意みたいだしね』

念話で話している間にも戦闘は砲撃戦に変わる。フェイトは金色の、なのはは桃色の砲撃を放って、二人の間で激突する。

『余波が全部なのはの方に流れてる』

『地力が違うもの。当然よ。……って』

その瞬間、なのはが砲撃の出力を上げてフェイトを撃ち抜いた。でも……

『直撃してないね』

『砲撃を撃ち抜かれたと同時に回避行動をとってる。おそらくこれで……』

なのはが砲撃を撃ち終わると同時に、フェイトはバルディッシュを大鎌に変形させてなのはの頭上から飛来。そのまま……

『……チェックメイトよ』

……バルディッシュをなのはの首筋に当てた。その瞬間、レイジングハートからジューエルシードが吐き出される。

『……高町が所有するジュエルシードは、後二つ』
『……そろそろこっちも準備しないとね』

言い終わると、私は鳥に変化して旅館に戻った。

第十四夜 断絶×次元震×孫子兵法（前書き）

高校の試験勉強が大変で、更新が遅れました（^| ^:）。すいません。

第十四夜 断絶×次元震×孫子兵法

翌日

「……ここならどうかしら？」

「……時間稼ぎも簡単に出来そうですね。シヤナはどう思う？」

《私も鈴音と同じ意見よ》

周りを軽く見まわしてから、私たちはプレシアさんに向き直って答える。

私たちが居る現在位置は、時の庭園の最下層部（原作でプレシアが虚数空間に落ちたところですby作者）。自分を対象とした占いの結果を見た私は、旅行から帰った次の日……つまり今日から泊まり込みで術式の準備をすることにした（この件について家族は了承済み）。

ちなみに占いで出たカードは『星』と『悪魔』の正位置と『剣の？』の逆位置。意味は『友情』と『束縛』と『敗北』。『友のせいで束縛を受け、計画は失敗する』……という意味にとれた。連続してこの未来の回避法を占ったら、『杖の？』と『星』の正位置と『恋人』の逆位置が出た。意味は『素早い行動』と『友情』と『周りの関係を断ち切る』……

《『失敗したくなければ素早く友情関係を断ち切れ』……だったわよね》

「本当に良いのね？」

「プレシアさん、その言葉何回目ですか？ 大丈夫ですよ。私は後悔していません」

なんせ誰も成功した事のない術式を使うんだからね……失敗なんか絶対させたくない。主に私の興味の為に！

《なんか決意の理由がおかしいと思うけど……まあ、良いか》

「でも……未だに信じられないのだけど、あなたの方法でアリシアは甦るの？」

「計算上では大丈夫です」

プレシアさんの疑問に対して、私は即答する。

「実際に手に持って確認したら、ジュエルシード一つ分の『存在の力』の総量がすべて同じでした。これなら二十個半あれば術式は完成しま……」

言いきろうつとしたその時、突如時の庭園内を強い揺れが襲った。ちよつと待って、ここ地球じゃないよね！？　なんで地震が起きるのよ！？

《次元震だね》

「え！？」

《簡単にいえば、次元空間内で発生する地震の事。ジュエルシードみたいなものが暴走すると発生する……って事はまさか！？》

「『プレシア、フェイトが！』」

シヤナが叫んだと同時に、アルフからプレシアさん宛てに通信画面が開いた。スクリーンに映ったアルフはボロボロと涙を流していて、声もかなり震えていた。

「落ち着きなさいアルフ。それで、フェイトに何があったの？」

「『それがジュエルシードを回収するときに、白服のガキのデバイ

スとバルディッシュが組み合ったせいで爆発が起きて、バルディッシュが中破して！ それで……！」

そこまで言うと、アルフは話の途中なのにまた泣き出した。

《……さっきの次元震はそれが原因だったのね》

「それで、フェイトはどうしたの？」

「……ジュエルシードの暴走を無理やり止めた所為で、フェイトの手のひらがボロボロに……！」

「！ ちよつと待ってなさい。すぐ行くから！」

プレシアさんはそう叫ぶと同時に、自身の真下に魔法陣を展開して転移してしまった。

《……追いかけてなくて良いの？》

「私達が直せるのは封絶内の物体だけでしょ？ まったく、答えが分かかって聞くななんて意地悪だよ」

《自分の力を過信していないか確認しただけよ。物事が上手く運び過ぎている今は、一番危険な時期だからね》

シヤナの言っている事は正論よね。月村家の書庫に在った『孫子兵法』にもこう書いてある。『彼れを知りて己を知れば、百戦して殆うからず。彼れを知らずして己を知れば、一勝一負す。彼れを知らず己を知らざれば、戦う毎に必らず殆うし』。つまり相手を知り、自分をちゃんと分かっていたら危険な状態にならない。だが自分を知っていても、相手を知らなければ勝ったり負けたりするし、どちらも知らなければ何時も危険な状態に陥る。……と言う風に私は解釈している。

……ぶつちやけ、なのは魔法の才能には目を見張るものがある（魔法に出会って三日目で集束系の上位魔法、『レストリクトロック』

を発動させたりしたしね。因みに、私は未来予知の自在法組むのに四年かかりました。だから私は、今のなのはの實力を推し量ることとはできない。とゆうか推し量っても、次に戦場で会う時にはさらに強くなってるから意味がない。だからここで自分の實力を過信していたら、絶対に強烈なしっぺ返しを食らう。

「過信していてどうにかなるのなんて、チーター（チートをしているプレイヤーのこと）しかないわよね」

《そうよね。……もうこの話はお終い。とっとと準備に取り掛かりましょ？》

「了解」

そう言うとは私は夜笠を展開して、プレシアさんから渡されたジュエルシードを取り出す。そして一個一個、術式を埋め込んでいく。：

…今夜は徹夜かな？

第十四夜 断絶×次元震×孫子兵法（後書き）

原作キャラとの絡み&戦闘が少ない……

この路線でいいのでしょうか？

第十五夜 乱入×燐子×爆発（前書き）

KY登場です。

第十五夜 乱入×燐子×爆発

六時間半後

私の掌から蒼くおだやかな光が消え、手持ちのジュエルシードすべてに蒼い炎が灯った。……うう、終わった！

《一個当たり三十分か……掛かり過ぎだよ》

「改良が必要だね……どう整理すればいいんだろう」

私はその場に腰をおろしながら、両手の間に蒼色の自在式を展開する。その中に見える線は見事にこんがらがっていた。

《AからEまでを短絡させればいいんじゃないの？そこは別に無くても良い所だし》

「……ホントだ。これなら十分は短縮できる（私もまだまだだね。こんな事に気が付かないなんて）」

自分の未熟さを反省しながら、あやとりをするように両掌の間に展開している自在法を動かして、シヤナが言ったところを整理し……ようとしたら後ろから光が差し込んだ。慌てて振り向くと、白いマグカップを持ったプレシアさんが立っていた。

「精が出るわね。紅茶の差し入れよ」

「あ、ありがとうございます。プレシアさん」

ちやちやっと整理を終わらせてから立ち上がって受け取り、少し冷

ましてから一口飲む。良い茶葉を使っているらしく、良い香りが鼻腔内に広がった。

「…砂糖を入れておいた方が良かったかしら？」

「いえ、ストレートの方が好きなので大丈夫です」

「ふふっ、そう……それと、フェイトから良い知らせよ」

《……何？》

「『未回収のジュエルシードはあと一つ』…だそうよ」

《「ホントですか（なの）！？」》

プレシアさんは笑顔で頷く……よし、これで目標に一步近づいた！

「でも、あと一個の場所が分からないそうなのよ。バックアップ頼めるかしら」

「え……座標教えた筈なのになんで」

《「また場所が移動しちゃったんじゃないの？ まあ、了解しました」》
「頼むわね」

プレシアさんに向かって頷く。それと同時に足元から紫色の光が私の体を包み、次の瞬間には暗い室内から遠見市のマンションの屋上に移動していた。

「……転送術式、自在法で組めるかな？」

《「無理ね。今度、探耽求究に頼んだら？」》

「…会いたくないけど、しょうがないか」

原作読んだけど、ダンタリオンってあんま好きじゃないんだよね。

フェイトちゃんの家に着いた後すぐに眠りに就いた私は………現在、アルフに叩き起こされてジュエルシード発動地点に急行中です。なお、私は何時ものように鳥に獣化しています。

「ふあ〜〜………眠い」

「十四時間も寝といて何言ってるんだい！」

《ホントだよ》

「シヤナまで酷い！ 一緒に寝てたじゃないのよ！」

「三人とも、見えたよ！」

そんな言い争いをしているうちに現着したらしい。海の真横に木の化け物が居座っていた。その横には白い魔法少女………なのはの姿もあった。

「じゃあ、私は何時も通りに待機してるよ！」

「分かった。こっちは任せな！」

短く言葉を交わした後、アルフ達と別れて近くの木の枝の上にとまる。

そして、フェイトは化け物に向かって大量のプラズマランサーを放つ。しかし………化け物が張ったバリアによって全弾防がれた。

『バリア！？』

『あれ、今までの暴走体よりずっと強い』

私が驚愕してる間に化け物は自分の根でなのはを叩こうとするが、
なのはの両足に羽が生えて上昇し避けて、レイジングハートを音叉
型に変形させる。

その間にフェイトもバルディッシュを変形させてアークセイバーを
放った。放たれた回転する金色の刃は、根を切り裂いて木に直撃：
…する前にまたしてもバリアに阻まれる。

そして、なのはの方はと言うと…：環状魔法陣を展開して魔力を収
束し始めていて、それをそのまま放った。

『…：ねえ、心なしか砲撃に籠めてある魔力が増えてない？』

『そのようね。まったくあの子、どんだけ才能に恵まれているのよ』
放たれたデイバインバスターは化け物を押しつぶすが、まだしぶと
く張られたバリアによって阻まれていた。

それを見たフェイトは、目の前に円形魔法陣を展開してサンダーズ
マツシャーを放つ。桃色と金色の魔力の奔流に耐え切れなくなった
化け物は、光を放ってジュエルシードを空中に吐き出した。

二人はデバイスを手リングモードに変形させて、同時に封印魔法
をジュエルシードに打ち込んだ瞬間、真っ白い光が辺りに満ちる。

『…封印成功みたいね』

『そうみたいね』

二人はジュエルシードと同じ高さまで上昇して言葉を交わして
いる。そして、デバイスを通常モードに変形させて近づいて打ち込
んだ。…：見なれない水色の円形魔法陣が展開している隣で。

『何あれ！？』

『鈴音、早く近づいて！』

『お、オツケー！』

シヤナに急かされてその場から離れる。転送時の光が消えたその場には……

「ストップだ！」

右手で持っているデバイスでバルディッシュを防ぎつつ……

「ここでの戦闘は危険すぎる！」

左手でレイジングハートの柄の部分を掴んでいる……

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！」

かつてSAOに存在した生還者サバイバーにとっての勇者……

「詳しい事情を聴かせて貰おうか！」

剣士キリトに似ている少年がそこにいた。

『時空管理局！？』

『やっぱり、あの時の次元震で気付かれてたんだ！ 鈴音、早くジュエルシードを回収して！』

『分かってる！』

執務官殿が律儀に二人をおろしてる間に、空中に浮かび続けていたジュエルシードを奪いながら獣化を解き……

「……えっ（なっ）！？」「」

「封絶！」

トリガーワードを唱え、世界が幾何学色から緋色に変わる。そして私自身も紅蓮の炎に包まれ……炎髪灼眼となり、夜笠から刀身が錆びついている小太刀を引き抜いて…

「はあっ！！」

…ハラオウンと名乗った奴のデバイスに打ち込む。すると、手応え無くデバイスが両断された。

突然の乱入者に驚いている高町たちをほっとして、テストロッサに声をかける。

「テストロッサ、アルフ、離脱するよ」

「え…」

「お、おう！」

呆けているテストロッサの腕を掴み、アルフの横まで駆けだす。

「待て！」

後ろが喧しいけど気にせずアルフの横に移動して言葉を交わす。

「テストロッサとアルフは遠見市の住んでいたマンションの屋上へ。移動したら多重転送の準備をして」

「うん、解った」

「シヤナたちはこの後どうするの？」

「高町たちを戦闘不能にさせる。しばらく追ってこれないようにしない」と

夜笠に手を突っ込んで『奥義』と書かれた符を取り出し、振り返っ

てから封絶を一瞬だけ解除する。

《…今!》

「転送!」

背後で金色と橙色の光が一瞬だけ発生する。その後すぐに世界は緋色に戻った。

「お前、何のつもりだ!」

「鈴音ちゃんもシヤナちゃんも、何でこんなことするの!？」

「うるさい。こっちの勝手よ」

《そうそう》

符を眼前に翳すと鈴音が蒼炎に包む。そして振りかぶって…

《東洋符術奥義…》

…投げる!

《「百鬼夜行!」》

トリガーを引くと、符から大小さまざまなデフォルメされた妖怪の姿をした燐子たちが百体出て来て、ハラウンと高町に纏わりつく。

「ふえええええつ!?!」

「くっ、何だこれは!?!」

相手が混乱している間に、私は夜笠から透明なハンドベルを取り出して…

《「踊りながら果てなさい(る)」「》

…鳴らす。

チリリリン

《「ダンスパーティー!!!」》

ドカーーン!

纏わりついていた燐子たちが一斉に爆発する。その爆炎に包まれた高町たちの叫びを無視して封絶を解いて……獣化の自在法を発動して鳥になってすぐさま遠見市に移動する。

………計画の最終段階は近い。気合い入れていこう。

第十五夜 乱入×燐子×爆発（後書き）

ギャラリー様、御感想&素敵な宝具をありがとうございます。

御感想は登録していない方でも送れるように設定いたしましたので、
励みになるので待っています。

第十六夜 果たし状×鍵×決戦（前書き）

サブタイトル思いつきませんでした。そしてグダグダ&無理やりです。……もしかしたらスランプぎみかもしれない……

第十六夜 果たし状×鍵×決戦

遠見市のマンション屋上で合流した私たちは、すぐに多重転送を使つて時の庭園に帰還した。

今は玉座の間に全員集合して相談中。議題は『なのは側が回収している二つのジュエルシードの奪い方』。

結論から言うと、私達が出した『お互いのジュエルシードをすべて賭けて、フェイトが代表として試合をする』という案に落ち着いた。他の案はと言つと……

アルフ：奇襲して奪う。

なのはの周りには、監視するために大量のサーチャーが飛んでいる筈。襲おうと接近でもしたら管理局側に即刻ばれて、お縄になる可能性が高い。だから即座に却下した。

プレシアさん：私なのはの心を自在法で掌握して奪い取る。

リヤナンシーが記した禁書にそんな術式は書いてなかつたし、自分で開発するには時間が足りない。有効な案だろうけど却下した。

フェイトちゃん：私達と同じだが代表が私達。

私達の力に非殺傷設定みたいなものは存在しない。経験を引き継いでいるシャナはともかく、私だったら誤つてなのはを殺してしまうかもしれないから却下。……ん？ だったらシャナに変われ？ 封絶張つたら転送魔法使えなくなるから却下。友達の話聞く限り管理局つて相当腐敗しているみたいだから、こっちが勝った瞬間に丸ごと奪うかもしれないし……やっぱダメ元でダンタリオンに頼みこんで、封絶関係なく転送出来る『我学の結晶』を作ってもらおうと。

閑話休題

その後、フェイトがゲットした残りのジュエルシードに術式を埋め込んで、なのはにメールを送ってから、戦闘訓練を白昼夢内でみっちりやって疲れ果てたその夜

「……………必勝のお守りが欲しい？」

「うん。ダメ…かな？」

私達に与えられた部屋で、『さあ、寝るぞ〜！』って布団に入ろうとしたらフェイトが訪ねてきました。……………お守りね〜。あ、丁度いいのがあった。

「じゃあ…はいこれ」

私は机の上に乗っている黄金の鍵を一本選んでフェイトに手渡しする。

「…鍵？」

「そうだよ。これがフェイトを守ってくれるはずだよ」

「……………うん、ありがとう。おやすみ」

「おやすみ〜」

フェイトは渡した鍵をしばらく見ると、それをポケットにしまって私の部屋から出ていった。さて、寝…

《あんなもの渡してよかったの？ あれ、相当危険なものなんじゃ…》

…れなかった。シャナが話しかけてきたため、私は布団に腰をかけ

て応対する。

「発動条件が違うから、人間が使う分には命は落とさないから大丈夫だよ」

《……と言うことは、人間以外の発動条件は原作と同じ？》

「その通り。それじゃ」

私は部屋の電気を消すと布団に入り込んだ。

「おやすみ」

《おやすみ》

シヤナの声が聞こえるとほぼ同時に、私はまどろみの中に落ちて行った。

翌日

プレシアさんを除いた私達三人は、眠りから覚めようとしている海鳴の町の沿岸部に移動した。プレシアさんは時の庭園内に残って転送魔法の準備中。つまり勝っても負けても勝負が終わったら即とんずら〜…と言うわけ。なお、まだ管理局側は来ていないからみんなそれぞれ違うことをしている。フェイトは街灯の上で瞑想中で、アルフはそんなフェイトをじっと見ていて、私の方はシヤナと雑談していた。

キーン

そんな時、聞きなれた音と共に円形魔法陣が展開されて、私たちはその地点を凝視する。転送時の光が消えるとそこには、バリアジャケットを展開してレイジングハートを装備したなのはと、フェレット形態のユーノ。そしてデバイスの修理が終わってないのか、違うデバイスを装備した執務官殿がいた。なのはは私達の姿を見て何か言おうとするが執務官殿が制して、私の方を向きながら代わりに口を開いた。

「お前が月村鈴音か？」

「そうよ」

私は腕を組みながら、その発言に対応する。

「なのはに送ったメールの内容に嘘偽りはないか？」

「ええ。メールに書いたように、こちらが負けたらジュエルシードを全部渡して大人しくお縄につくよ。その代わりに…」

「こちら側が負けた場合、ジュエルシードをそちら側に全部渡す…
だな」

「はい。それでは、始めましょうか」

決戦の幕が上がる。

第十六夜 果たし状×鍵×決戦（後書き）

サブタイトルのアイディアを考えてくれたギャラリー様、ありがとうございます。

第十七夜 火線×決着×計画始動（前書き）

この物語に出てくる一部の宝具は改変されています。

第十七夜 火線×決着×計画始動

夜明け前の海上で、桃色と金色の二色の光が交錯する。桃色の光を纏うのは、本来接近戦は苦手なはずの私の友達 高町なのは。そして金色の光を纏うのは、バルディッシュを大鎌に変形させた私の戦友 フェイト・テストロッサ。
何回か重なりあったのちに二人は離れて……

《Photon Lancer》

フェイトはバルディッシュを斧に変形させて、紫電を帯びた魔力スフィアを四つ形成。

《Divine Shooter》

なのはもレイジングハートを掲げて、桃色の魔力スフィアを四つ形成。二人はそれを……

「ファイア！」

「シュート！」

…放った。計八つの弾丸は、たがいにぶつかり合うことなく対象に向かっていく。

「ねえ、君達はいったい何がしたいの？」

…話しかけられたため渋々ながらも首だけで横を向くと、そこには執務官殿とユーノが居た。

「…どういう意味？」

「なのはとこのフェレットもどきからから聞いたぞ。最初は彼らに協力していたそうじゃないか。それなのに何故寝返つたんだ？」

「……まあ、最初は友達だから心配で協力してました。でも、ユーノの話聞いて気が変わった」

フェレットもどきと言われてキレかけてるユーノを、華麗に無視して話を続ける執務官殿に苦笑いしながら彼の疑問に答える。

「気が変わった？ でも僕たちに言つた理由は…」

「それは表向きの理由よ。本当の理由は二つある」

私はそう言いきつてから自分の体を彼らに向き合わせて、プレシアさんに協力する理由を話し始める。……やっぱり、私は非情にはなれない…か。

「本当の理由の一つ目は、ユーノの言葉が信じられなかったから」「なっ！？ どうして！？」

ユーノは驚いているが、執務官殿は私の理由が納得できるようでも言わない。私はため息を一つ吐いてから話を再開する。

「この騒動の発端になった事件の証言者は、私達の知る限りではユーノしかいない。つまりあなたが嘘を吐いても誰も気付くことは無い。…違う？ そもそも、ジュエルシードの回収を民間人なのはに手伝ってくれるように頼んだのは、自分がへまをして信用が落ちるのを防ぎたかつたからじゃないの？」

私が発した言葉を聞いたユーノは、何も言わずに顔を伏せた。…だんまりか。そんな奴は見たくないので私はユーノを視界に入れない

ようにして話を続ける。

「まあ、そう言う可能性もあったってだけよ。実際には違った訳だしね」

「だが、それだけでは寝返った理由が説明できないぞ」

「焦らないで下さい。……二つ目の理由は、単に私の興味の為」

「「なっ!?!」」

私の言ったことが心底意外だったようで、二人は驚きの声を上げて食いついてきた。

「そんな理由の為だけに犯罪者に手を貸すのか!?!」

「それに犯罪者の言葉の方が、僕よりもっと信用できないじゃないか!」

『アルフ。今から言うことは全部出任せだから気にしないでくれる?』

『解った。プレシアやフェイトにも伝えておく』

『お願い』

アルフに一言断ってから、私は目の前で怒りの形相を浮かべた二人に対して言い放つ。

「信用する必要なんてありませんよ。ただ単に利害が一致したから協力してるにすぎないからね。……利用できなくなったら私は平気で裏切りますよ」

「「っ!?!」」

『……なんか、今の言葉に貫録を感じただけだ』

『こつ言つ状況が多発する所に二年間も放り込まれたら、嫌でも貫録が付くよ』

SAOの中じゃ、こう言うことは日常茶飯事だったからね。……前にギルドの護衛をやった時には、クエストクリアした瞬間に『利用価値が無くなった』とか、『レアアイテム寄こしやがれ!』とか言いながら護衛対象が襲ってきたっけ。…全員返り討ちにしたうえで牢屋にぶち込んだけど。

「…っと、そろそろ決着が付くみたいだね」

私の発言を聞いて何故か固まっている二人を視界から外して海上上空に視線を向ける。そこには、両手両足を金色の輪みたいので拘束されてるのはと、大量の魔力スフィアの中で呪文詠唱しているフェイトの姿があった。

「シャナ、なのはを拘束しているあれ何?」

「バインド魔法よ。その名の通り敵を拘束する魔法の事」

「…あれ見たいなバリエーションもあるんだね」

「その通りよ。ちなみに、あなたがForceで見たのは鎖型のチーンバインドね」

「解説ありがと」

念話でシャナの解説を聞いていると、どうやらフェイトの魔法が完成したみたいだ。周りの魔力スフィアが輝きを増している。

「フォトンランサー・ファランクスシフト。撃ち砕け、ファイヤー！」

フェイトが号令すると、周りのスフィアから一斉にフォトンランサーが放たれてなのはに着弾して、周りは爆炎に包まれる。けど…

『なのはの奴。シールドで全部防ぎきってる』

『みたいね。しかもこれはテストロツサが持つ最大の攻撃魔法だったはず……私達側の勝ちが薄いわね』
『そのようだね』

フェイトが止めを刺そうと残りのスフィアを収束させ終わった時に、爆炎が完全に晴れた。そこには……傷一つ負っていないのはがいた。そしてなのは……

「こんどはこっちの……！」

《Divine…》

…音叉型に変形させたレイジングハートの矛先をフェイトに向ける。そして環状魔法陣を発生させながら魔力を集束し始めた。そしてそれの……

「番だよ！」

《Buster》

…引金を引いた。フェイトはスフィアを慌てて投げるが、その弾丸は桃色の力の奔流に吞まれる。そしてなのはの砲撃は、威力を全く減衰させることなくフェイトに届こうとする。フェイトはとっさにシールドを張って防御するが、完全には防ぎきれず攻撃の余波によってバリアジャケットの一部が千切れ飛んだ。私達やアルフはそれを見て安堵のため息を吐くが、さらに上空で灯った桃色の光を見て心の余裕がが消しとんだ。

「受けてみて。ディバインバスターのバリエーション！」

矛先に光を灯したレイジングハートを持ったなのはの足元に、円形魔法陣が展開される。

《Starlight Breaker》

レイジングハートが魔法名を唱えると、戦闘空域全体から桃色の流星が円形魔法陣の中心部に向かって集まり、巨大な桃色の球体を作り出す。……しゃ、シャナ。あれ見るとさっきから冷や汗が止まらないんだけど…あれ、何？

『集束砲の前準備よ。あれは、戦闘空域全体に漂ってる残留魔力をかき集めて出来た巨大な魔力の塊…！』

『不味いよ！ あんなもん受けたらいくら非殺傷設定とは言っても、フェイトがシヨック死しちまうかもしれない！』

『嘘でしょ！？』

フェイトも回避行動を取ろうとするが、桃色の輪によって空中に縫い付けられた。……神様、仏様、ユキちゃん様！ お願いします。

私が渡したお守りに秘めた力を解き放って下さい！！

「これが私の全力全開！ スターライト…！」

私達の心配なんて全く気にせず、なのははレイジングハートを振り下ろして…

「ブレイカー…！」

…集束砲の引金を引いた。さっきとは比べ物にならないくらいの魔力の奔流がフェイトに迫り直撃する…筈だった。何故ならフェイトの胸から青色の火線が飛び出して、集束砲の魔力を全て吸収してしまったから。

『『!?!?』』
「良かった…発動してくれた」

私以外の全員が状況が読めずに混乱していると、火線がなのはの全身に巻きついて…

ドカーーーーン!!!! 「にやああああっ!」

…大爆発を起こした。爆心となったなのはは悲鳴を上げて墜ちて行く。

「…なのは!」

『す、鈴音。一体何が起こったんだい!?!』

『お守りが発動したんですよ。詳しい説明は後でします。アルフ、なのはも含めて全員転送お願い!』

『お、おう! プレシア!』

アルフが呼びかけると、海上の二人には紫の、私達の足元には橙色の円形魔法陣が展開された。

「! 待て!」

「転送!」

アルフがトリガーを引くと、私達は次の瞬間には時の庭園に移動していた。

「お疲れ、フェイト」

「うん、ありがとうアルフ」

ドサッ

アルフが労いの言葉をかけるとフェイトは安心したのか、気を失って倒れてしまった。

「フェイト！ ……気を失っているだけか」

「あんな戦いをしたんだもん。しょうがないって」

「…そうだな」

アルフは私の言葉に相槌を打つと、フェイトを背負って歩き始めた。私もなのはを背負って歩き始める。

「…なあ、さっきのあれは一体何なんだい？」

「フェイトにお守りと偽って渡しておいた宝具、ゴルディアン・ノット非常手段が発動したんですよ」

「ご、ごる……何だって？」

「ゴルディアン・ノット非常手段。制作時に組み込んだ自在法を発動させる宝具で、人間が使う場合発動条件が厳しんですよ」

「条件って？」

「あれの場合は、体が限界ぎりぎりの時に砲撃系攻撃を一回食らってから、それ以上の砲撃を食らいそうになると発動します」

「…博打だな、それ。フェイトが限界じゃなかったらどうするんだい」

「終わりよければすべてよし。別にいいじゃないですか」

とか言っている間に玉座の間に着いたみたいで、アルフと私と一緒に扉を開けた。……さて、頑張りますか！

第十七夜 火線×決着×計画始動（後書き）

無印編は後二、三話で完結します。

第十八夜 分離×侵入×分断（前書き）

鈴音無双です。

戦闘描写が難しい……

第十八夜 分離×侵入×分断

玉座の間でフェイトの状態や、術式の始動をプレシアさんに説明した私達は廊下で別れてそれぞれの自室に向かった。

自室に着いた私達はなのはをベットに寝かせてからシヤナに頼んで夜笠を展開して貰い右手を突っ込むと、無意識に中から金色の腕輪を取り出して左腕に装備する。不審に思いながらも頭の中に流れ込んできた情報を頼りに左腕を振ると、何処からともなく極細の糸が飛んできて、なのはを両手足と首に巻きついて壁に縛り付けた。……わお。

《何、高町を縛り上げちゃって。…これから襲う気？》

「違うよ！ てゆうか私にそっち系の趣味はないってば！！」

シヤナの言葉を全力で否定してから、改めて装備した『誓約の腕輪』に似た装飾の腕輪を見ながら、流れ込んだ情報の一部を読み上げる。

「宝具名、『ドルマスター燐子操者』。元々は、制御不能のミスステスや燐子を制御して支配下に置くための宝具。但し、支配下に置くためには何れの場合でも、対象が睡眠中。若しくは疲れ果ててないといけない」
《……鈴音。アンタは何時から電波少女になったのよ。なんか怖いんですけど》

「…どうやら初見の宝具だと、無意識に入ってきた情報を読み上げちゃうみたいだね。……でも、前見たときにはこんな宝具なかったはずだよな？」

《ああ、それは……ユキが読者様のアイディアを読み取ってあ」「はいはい、メタ発言禁止！」……了解》

ユキちゃん……ありがたいけど、そんなにたくさんのお宝なんて扱いきれるわよ」……え!？」

「そのために『宝具の担い手』のスキルを渡したんだよ? とゆーか、出来なきゃ困る」

恐る恐る声のした方を見ると、ベットの陰からユキちゃんが顔を出していた。……てゆーか、今まで音信不通で一体何やってたの?

「それは勿論ルーンとの新婚旅行よ。まだ途中だけど世界一周旅行は楽しいわよ?」

「お熱い事だ。しかも世界一周って……旅費はどうしてるのよ? 主に交通費とか食費」

「決まってるじゃない。無賃乗車に無銭飲食よ」

「元神様が何やってんですか!? てゆーかルーンも止めようよ!」

もしかして今から嫁の尻「ユキちゃん」に敷かれてるの!? ……ルーン、強く生きなさいよ。

「まあ、それよりも……もう一人の鈴音。妖力がたまってきたから何時でもいけるわよ」

《ようやく? 待ちくたびれたよ。後、私の名前はシャナ》

そんな事を思っていると、ユキちゃんが急に真面目な目線に変わってシャナに話しかけてた。……何がいけるって?

「シャナ……で良いのよね? まあ彼女を融合騎として転生させる事よ。元々、鈴音の中にシャナを入れる筈じゃなかったからね」

「入れる筈じゃなかったって……どういうこと?」

《私は元々鈴音をサポートする融合騎として、ジュエルシード事件が始まる少し前にこの世界に来るはずだったの。でも、その前に…》
「私が神の権限を剥奪されちゃったのよ。その所為で神力が徐々に無くなっちゃって、自分達を猫又に転生させるのが精一杯だったのよ」

ユキちゃんは立ち上がって、前足で器用にお手上げポーズをとった。
…か、可愛い。

「でも……あなたは今の時代のこの世界についての知識ゼロでしょ？ さすがにその状態で転生させるのは気が引けたから、残りの雀の涙ほどの神力使って、シヤナに出来るだけの知識を詰め込んであなたに憑依させたの」

「その判断のおかげでもものすごく助かったよ……でも、なんでこの世界に知識ほぼゼロの私を転生させたの？」

「しょうがないじゃない。輪廻転生の輪がここしか空いてなかったんだから」

「……納得したわ」

「それじゃ、行くわよ」

ユキちゃんはそこまで言うと、何処からともなく髑髏が描かれた五角形のもの（とゆうーか死神代行証）を銜えて、こっちに走ってきて私の体にぶつかる。すると、体から何かが抜け出す感覚がしてユキコートスから光が消えた。

「明日には会わしてあげるわ。後、夜笠の使用権限も渡して在るわよ……それじゃ、またね」

《少しの間さよなら、鈴音》

「うん、またね。ユキちゃん。シヤナ」

短く言葉を交わすのを最後に、後ろから気配が消えた。それとはほぼ同時に、壁に縛り付けていたのはが体を震わせて目を覚ました。

「う…ううん。ここは？」

「目が覚めた？」

「す…ずねちゃん？」

「他の誰に見えるのよ」

「…って、にやああっ!？ な、なにこれー!？」

ようやく意識が完全に覚醒したのか、なのはは自分の状況を見て慌てた。糸を外そうと必死になってもがくが…そうは問屋が卸さない。左手をあやとりするように動かして、糸を肌食い込ませ始める。

「あ、ああっ！」

「さてなのは。残りのジュエルシードを渡してもらおうか？ 渡してくれたら解放するよ」

そう言いつつも締め上げる力をさらに強くする。なのはは痛みによって涙を浮かばせて、絞り出すように疑問の声を上げた。

「すず、ねちゃん。な、なんでこんなこと、するの？」

「魔法に関わるのは、こういうことが日常茶飯事に起きる裏に関わるのと同義。死にたくなかったら早く渡しなさい」

まあ、ぶっっちゃけ死なないけど。これ殺すための宝具じゃないし。

…でも、こっぴうのも現実だっけって解らせないと、後々危ない。今は非情にならないと。

「…レイジング、ハート。ジュエ、ルシードを、渡してあげ、て」

《……All right・Put out》

なのはが命令すると、レイジングハートは宝石部分から残りのジュエルシードを吐き出した。私はそれを確認すると夜笠を展開して右手を突っ込んで、中に入ってる何かを起こして炎を籠める。

「ありがと。そしておやすみ。高町なのは」

私が呟くとなのはは怪訝そうな顔をするが、私は特に気にせずになら古風な銀色のリボルバー銃 トリガーハッピーを抜きながら、なのはの胸の中心を狙って引金を引いた。

パンツ！

乾いた銃声と共に大した反動も無く蒼く発光する弾丸が銃口から吐き出されて、狙った場所に吸い込まれるように向かっていく。

《Protection》

「無駄だよ」

レイジングハートが円形魔法陣を発生させるが、弾丸が触れた瞬間にガラスのように砕け散った。そしてそのまま弾丸はなのはに命中して、なのはは普段着に戻って目から光が無くなった。…別に死んでないけどね。

私は^{ドールマスター}燐子操者と銃を^{トリガーハッピー}夜笠にしまってから、右手に光を灯してジュエルシードに術式を埋め込み始める。術式の整理は昨日の内に終わらせておいたため、十分で一つが完了。次のを埋め込もうとした時に…

「『鈴音。不味い事になった！』」

…アルフが通信をかけて来た。…どつたの？

「それが…なんで座標がばれたのか知らないけど、管理局が攻めて来た！」

「っ！」

アルフの言葉を聞くと、私は力なく倒れているのはの近くに落ちている杖を睨んだ。…っち、しくった。

「ごめん、こつちのミス。アルフ、フェイトの容体は？」

「戦える状態じゃない…けど、昨日貸してもらった宝具のおかげで、誰もアタシらの存在に気付いていないよ」

「それは良かった…！…ボタン！」

足音が聞こえたので慌てて通信を切ったすぐ後に部屋のドアが蹴り開けられて、デバイスを持った局員らしき人たちが十五人ほど入ってきた。そしてリーダーと思われる男は、私を後ろにいるのを一瞥して私の罪状を読み上げる。

「スズネ・ツキムラ！ 公務執行妨害及び殺人、その他諸々の罪で逮捕する！」

「…ハア」

一つ冤罪があるのはこの際に気にせずに、溜息一つ吐いてポケットから『剣の騎士』のタロットを取り出して、丸めて両手で引き伸ばす。そうして現れた945を抜いて床に突き刺す。局員達は身構えて魔力弾を生成するが…

（そんなことやって、無意味ですよ）」

「「？」」

どうやら口に出ていたようだ。局員達の怪訝そうな視線を浴びつつ、右手で夜笠から銀色の小刀を取り出して…

《Engage Konig 945》

「リアクト」

…左掌に突き刺した。思いつきり突き刺した筈なのに、不思議と痛みはまったく感じない。むしろ、心に巣くっている恐怖がどんどん消えて無くなっていく。そして次に電子音声で聞こえた瞬間には、私は黒い炎柱に包まれてた。

ズドオツ！

《React》

『『！？』』

今まで来ていた服が消えて粒子となって消えて体に纏わり、シャナちゃんが悠二との初邂逅時に着ていた服として再構築された。その後、床に突き刺して在る945が粒子となって私の両手に集束していく。

Side 三人称

「なんだ…あれは？」

「おい、何が起こってるんだ？」

「俺に聞くなよ」

急に炎に包まれた鈴音を見て、外の局員達は困惑していた。まあ武器を出したにも拘らず、それを一旦放置。その後新たな武器（しか

も先に出した武器よりも攻撃力が下だと思われ(る)を出して、局員に攻撃するのではなく自傷したのだから、困惑するのは至極当然な反応である。

ザンツ！

その数秒後、突然炎柱が切り裂かれ炎が消しとんだ。中から現れたのは黒一色に身を包み、禍々しい形のナックルガードを持った二振りの純白の太刀を両手に装備し、瞳が艶消しの緋色に染まっている鈴音が居た。局員はそれを見て、捕縛するために魔力弾を一斉に放ったが…

「無駄です」

《Divide》

…着弾する直前に魔法陣らしきものに全弾止められ…いや、魔力結合を分断させられた。ほとんどの局員はそれを見て騒然とするが、一番腕があると思われる局員だけは反応が違った。

「なっ、AMFか！」

デバインド
分断を効果が似ているAMFと誤認した彼は、AMFに対しての対抗手段である多重弾殻射撃を行うために、自身の魔力弾に膜状バリアを張り始める。だが、全ては無駄だった。

「AMFへの対抗手段を使っても無駄ですよ」

《Circle divide》

電子音声が聞こえると、部屋全体に魔法陣らしきものが展開されて、今度は局員が着ていた甲冑や魔力弾が強制解除され、デバインスの蒼

い宝石からも光が失われた。

「何グワツ！」

デバイスが機能停止したことに呆気にとられた局員達は、次々と鈴音によって倒されて行った。

一番前にいたリーダーの男は右の刀で袈裟に腹を切られ、その勢いで回転した鈴音による右足での回し蹴りをまともに食らって右側後方に吹っ飛んでいき、そちら側に居た局員五名を巻き込んで壁に激突。そのまま沈黙した。

その間にも鈴音は左前方に踏み込んで局員達を肉薄にする。自分が置かれてる状況が全く読めてない局員達は、慌てて防御魔法を張ろうと試みるが、魔力が分断されているためまったく張れる気配すらない。

鈴音は左の刀の腹で一番前にいた局員の右脇腹を叩いて吹っ飛ばし、返し刃で右にいた局員を左に切り上げる。ほぼ同時に右の刀で左にいた局員を逆風に切り捨てて、回転しながらさらに踏み込んだ。その後右奥にいた局員を左の刀で袈裟に切って、左奥にいた局員も右の刀で切り捨てられる。

鈴音は仲間が次々とやられて慌てふためいている残りの局員に右の刀の切っ先を向けると、縁のあたりに付いている引金を引いた。切っ先から放たれたエネルギーの奔流は瞬く間に残りの局員を呑みこんでいった。

鈴音はそれを一瞥すると、リアクトを解かずに部屋から出て行った。

S
i
d
e

o
u
t

第十八夜 分離×侵入×分断（後書き）

シャナの下りはおそらく賛否両論あると思われます。ただこのままだと、シャナがA S編で空気になる可能性があるためこうしました。

今回出てきたオリジナル宝具や改変宝具は次話に解説します。

オリジナル宝具&改変宝具

オリジナル宝具

- ・ドールマスター 燐子操者

- ・形状 誓約の腕輪に酷似
- ・効果 相手の捕縛、及び支配。
- ・備考 支配するためには対象が疲れているか寝ていないと駄目。また、人間やフレームヘイズは支配できない。使用時に片手が塞がる。作者オリジナル宝具。

スペクタン（マント型）

「存在の力」がトーチ程度しかない異例の宝具。纏うことで疑似的にトーチになれる効果を持つ。そこにいると事前に理解していない限り何も知らない人が気づくのは難しい。本体は留め具になっている幽霊の装飾であり、これを付ければ毛布だろうと襪褌切れだろうとそれが宝具「スペクタン」になる。ただし本体だけを装飾品として身に着けても何故か機能してくれない。

この辺りは「玻璃壇」がフレームヘイズを探知できないのと同様に原因不明。

製作者の嗜好？

ギャラリー様提案の宝具。

改変宝具

- ・トリガーハッピー
- ・リンカ コアの活動、及び精神を一日封印する。但し、対象者

は一体だけ。

・ゴルディアン・ノット
非常手段

・ 籠めた自在法によって発動制限が異なる。但し、魔法生命体を使う場合は原作通りとなってしまう。

第十九夜 吐血×悔しさ×蘇生(前書き)

アリシア、復活です。

第十九夜 吐血×悔しさ×蘇生

Side 三人称

部屋から出た鈴音は、廊下を一目散に走って玉座の間に向かっていった。……その背後には、進むのを邪魔したらしい局員達の末路が五体ほどいる。

「と、止まゲフツ！」

またもや進むのを阻止しようとした局員の顔面に、鈴音は右膝蹴りをお見舞いして吹っ飛ばし沈黙させた。鈴音はそれには目を呉れずに、一心不乱に走り続ける。

そして、もう少して玉座の間にたどり着こうと言う時に…

ドカアアアアアアアアアン！！

『『グアアアアアアアアアアッ！！』』

局員達の断末魔の叫びと共に、扉が紫電と共に文字通り吹っ飛んだ。鈴音はその光景に一時呆然とするが、気を取り直して玉座の間に入る。そこにいたのは…

「ガフツ、ゴフツ！」

「プレシア、しっかりしろ！」

…玉座の前で盛大に吐血しているプレシアと、それを心配しているアルフの姿だった。

Side out

「プレシアさん！？ だいzy：うわっ！？」

盛大に吐血しているプレシアさんの元へ駆け寄ろうとしたけど、視界が突如暗転して床に倒れてしまい、全身をとてつもない疲労感が襲ってきた。何事かと首だけを何とか動かして自分を見たら、945が元の日本刀型に戻っていてリアクターが左掌の近くに落ちていた。……リアクトが強制解除されてる！？ 一体何で…

「鈴音、大丈夫かい！？」

「なん…とかね。アルフ、肩貸してくれる？」

「ああ、任しとけ」

思考しているとアルフが駆け寄って来たため、945を杖代わりにして何とか立ち上がって、アルフの肩を貸してもらった。そして、プレシアさんの元へ連れて行って貰った。近くで見たプレシアさんの顔は真っ青になっており、吐き出された血は小さい水たまりになっていた。

「プレシアさん、大丈夫ですか？」

「…さつきから大規模な魔法を連続で使ったせいかしらね。私はもう、長くはないわ」

「っ！ そんな！？」

確かに、何時ショック死してもおかしくないほどの血を吐きだしているけど、私は目の前の命が消えていくことを認めたくなかった。

…また、こつやっただだ見ていないの？ 悔しい…悔しいよ。

「鈴音…最期のお願ひよ…アリシアを、蘇らせて…あげて」

プレシアさんの声は、残りの力を振り絞って出したような掠れた声だった。当初の計画ではこの後、あの部屋に移動してから術式を発動させるつもりだったけど…プレシアさんの容体から考えると、移動している間に力尽きてしまう可能性が高い。だったら…

「…アルフ。アリシアが入ったカプセルを持ってきて」

「はあ？ 何でだよ」

「計画変更だよ。此処で転生の自在式を行使する。プレシアさんが力尽きる前に早く！」

「わ、解った！」

アルフは応対すると、すぐにカプセルを取りに行ってくれた。私はその間に945とリアクターを夜笠に収納し、自分の体を無理やり動かしてプレシアさんを横に寝かせる。後は夜笠から毛布を取り出して、プレシアさんの体が冷えないように掛けた。そのすぐ後に後方が青色の光で満ちたと思ったら、人の気配が大量に消えた。…転送魔法で負傷した人員を回収したのかな？

「持って来たよ！」

「お、早いん…って」

後ろを振り返った私は、見えた光景に思わず硬直してしまった。いや、早く持ってきてくれたのは良いのよ…なんでカプセルを抱えて持ってきてる訳！？ 対象を浮遊させる魔法とか無いの！？

「いや、あるにはあるんだけど……アタシそう言う魔法苦手だよ」
「それ必須魔法なんじゃ……まあ、いいや。そこに置いて、それを支えておいてくれる？」

「あいよ〜」

ゴトツ

鈍い音と共に私の目の前にカプセルが置かれる。アルフはカプセルを置くとともにすぐに離れた。

「チエーンバインド！」

アルフが叫ぶと、カプセルの真下に橙色の円形魔法陣が展開されて魔法陣の色と同じ色の鎖が飛び出してカプセルを縛り上げた。

私はそれを確認しながら、全てのジュエルシードを夜笠から取り出す。そして、炎が灯って無いジュエルシードだけを手元に残して、他を周りにばら撒いた。ばら撒かれたジュエルシードは自らの力で宙に浮き続ける。私はそれを確認すると手元にあるジュエルシードを、胸の前に浮上させながら静かに瞳を閉じ…

キーン！

「そこまでだよ！」

「ジュエルシードを渡してもらおうか！」

…れなかった。魔法が作動するときの音とともに私達は青い糸によって縛られ、ユーノと執務官殿が玉座の間に入って来た。それを私は無視して、自身に身体強化の自在法をかける。そして青い糸を力づくで引き千切った。それを見て、執務官殿の表情が驚きに染まる。……どうやら、彼にとってはそれがありえない事のようにですね。

「なっ、ストラグルバインドを力技で解除した！？」

そんな叫び声は無視し、私は夜笠の中に手を突っ込んで、『猿』『熊』『蜘蛛』と書かれた三枚の符を取り出す。そのうち二枚を右の指の間に挟んで二人に向かって投げる。そして、最後の一枚を左手の指の間に挟んで二人の頭上に投げる。

「猿鬼、熊鬼、鬼蜘蛛！ あいつらを足止めして！」

トリガーを引くと、投げられた符が小爆発して白い煙に包まれる。そしてその中から人間大のデフォルメされた猿と熊が飛び出し、二人に殴りかかった。二人は防御魔法を張って防ぐが、数秒後に空気を切り裂いて降りて来た巨大な蜘蛛によって押し潰された。

「ありがと。鬼蜘蛛はそいつらをそのまま押さえつけておいて。猿鬼と熊鬼は周囲の警戒をお願い」

「くもっ！」「ウキッ！」「クマッ！」

頷いた彼らは私の号令に従って行動を開始した。……この子たちは、私が作った燐子type2。因みにtype1は百鬼夜行の燐子たちの事。

呼び出したら即私とのリンクを切られて、ダンスパーティーの砲弾となるtype1とは違い、type2は呼び出してもリンクは切られないし、自我を持っていて私のサポートをしてくれる。

閑話休題

「制御用自在式発動。『存在の力』に対して干渉及び間接制御を開始」

周りのジュエルシードのに埋め込んだ自在式を起動させる。すると、

ジュエルシードは蒼い炎に包まれた。……これが埋め込んでいた自在法の効果。『存在の力』に干渉して、それを私が扱いやすいように制御してくれる。でも、長くは持たない。

周りを見回して、全てのジュエルシードが蒼い炎に包まれているのを確認してから、目の前のジュエルシードに右手を添える。

「自在式、正常起動を確認。シリアル1から20迄の『存在の力』を制御及び掌握完了。続いてシリアル21に対して干渉及び直接制御開始」

右掌に炎を灯して、ジュエルシード内の『存在の力』を制御し始める。制御し始めてから感じるのは、膨大な力の奔流。私は脂汗を流しながら歯を食いしばってそれに耐えながら、同じ量の魔力をぶつけて相殺させ、その間に制御を何とか完了させる。

「ハア…ハア…シリアル21、制御及び掌握完了」

魔力の大半が持つて行かれたけど、これで下準備は完成した。後は本命を起動させるだけ。私は何も持つていない左腕を…

「転生の自在式…発動！」

…左に払って自在式を起動させた。すると私とジュエルシード、そしてカプセルを包み込むように火線の紋様が展開される。そして、炎がカプセル…いや、アリシアに流れ込んでいく。

『……ありがとう』
パキイン！

ふと、声が聞こえたような気がした。それと同時にカプセルが砕け

散り、私の意識も、そこで途絶えた。

第十九夜 吐血×悔しさ×蘇生（後書き）

次回は事後処理回となります。

無印編エピソード&次章予告(前書き)

更新遅れて申し訳ございません。ネットワーク接続権限を剥奪されていたもので…

それと、前回後処理回と予告していたのですが……どうしてこうな
った……

無印編エピソード&次章予告

こうして、テストロッサー一家が引き起こしたジュエルシード事件は、正史とは違う結末を迎えた。

ジュエルシードを抑え込むために魔力を全て使い切ってしまった、それが原因でノックダウンした私が次に目覚めたのは、次元航行船アーストラ内部の医務室のベッドの上だった。私の見張っていた執務官殿の話によると、私が使った転生の自在式は成功し、プレシアさんが犯罪を犯してまで生き返らせようとした愛娘、アリシア・テストロッサは全てのジュエルシードの存在の力と引き換えに、この世に再び生を受けることができたらしい。…だけどプレシアさんは生き返ったアリシアの姿を見た後、満足そうな笑みを浮かべて、眠るように亡くなっただけらしい。

私は、なぜかジュエルシードの存在を覚えていた執務官殿との説明会が終わった後、無罪放免（とゆーか、事件の火種となったジュエルシードが存在ごと消滅しているため、この事件は起こっていないこととなるから、罪なんてあるわけがない）となりその日の内にアーストラから降ろされた。

そして、家の目の前で融合騎に生まれ変わったシャナと合流して、久しぶりに月村家の門をくぐった……

……その後の話をしましょう。

なのはは、私が撃ったトリガーハッピーの効果が切れて目に光が戻った。そして、ユーノに教わりつつ魔法の練習を続けているらしい。フェイトとその使い魔アルフは、管理外世界での無断魔法使用の罪に問われて、管理局本局に強制入局させられた。執務官殿曰く、「これの前例は無い」とのこと。……聞いた瞬間感じた嫌な予感はこのせいだと信じたい。

アリシアは、シャナに自在法と魔術の素質見出され、私の家に居候しつつシャナから特訓を受けている。呑み込みが早いつてシャナは言ってたっけ。

で、私はと言うと「鈴音、もうすぐ実技試験よ。ウォームアップしなくて良いの？」

「え、もうそんな時間！？　ち、ちょっと待って！　今すぐ書き上げるから！」

……このまま無罪放免でそのまま……と言うのは気が引けて（と言うより、現実^{リアル}で人を切った罪悪感で押し潰されそうになったから）、管理局の嘱託魔導士試験を受けて、その罪を償おうとしている。……自在法がレアスキル認定されたおかげでここまで凄くスムーズに突破出来たのは助かった（安堵）。

「……よし、メール終了。シャナ、実技試験って何やるの？」

「確か試験官と戦うタイプの奴だった筈よ。普通の試験官だったら恐らく得意レンジは中遠距離」

私は目の前に展開された空間モニターを消すと、贄殿遮那を素振りしていた私そっくりの緋髪赤眼の女の子がこっちを向いて答えた。

……この子が融合騎になったシヤナ。因みにユキちゃん曰くこれがデフォルトラしい。

「……やっぱり炎弾使って牽制しつつ、弾幕掻い潜って接近戦……しかないかな」

「それしかないでしょうね。私が炎弾使ってサポートするから、鈴音は切り込むことに集中しなさい」

「オツケー。サポよろしく」

私は笑みを浮かべて右手を握って突き出す。シヤナはそれを見ると贄殿遮那を左手に持ち替えて……

「まかせなさい」

……私と同じように右手を握りながら突き出して、口角を上げて不敵に笑いながら私の拳に自分のをぶつけた。

『月村鈴音さん。実技試験開始まであと二分です。準備をお願いします』

機械のような無機質な声が試験会場に響く。その声を聞くと、私達は手を重ね合わせる。

「「ユニゾン……」」

……そして重ね合わせた所から、蒼と紅蓮の炎が発生して私達を包み込む。

「「イン！」」

そしてトリガーを引くと、私達は一つになった。

次章予告

二十一個の宝石を巡る物語は終わりを告げ、次に幕を開けるのは深い闇の物語。

「この名前は『闇の書』……呪われた魔導書だ」

目覚める史上災厄のロストロギア。

「お前の魔力。闇の書の餌だ」

《Samlung》

魔力を狙い、襲いかかる騎士たち。

「うち、つい最近家族が増えたんよ」

事件の渦中にいる少女。

「……奪え」

介入する仮面の男。

それぞれの思いが、海鳴で錯綜する。

「もう私の前で、誰も死なせない！」

【訂正しなさい。私達、でしょ？】

次章、闇の書編。

T a k e
o f f

無印編エピソード&次章予告(後書き)

いつもみたいに執筆しようとしたら、まとめられずこのような形になってしまいました。申し訳ありません。――――<

次回投稿時期は未定です。

空白期 「碧天との遭遇」(前書き)

黒「ふう、ようやく更新できました」

シャ・鈴(ハリセン装備)「遅すぎるわー!!」(スパパーン!)

黒「へぶっ! 一体何すんのってシャナさん。なんで贄殿遮那を振りかぶっているのでしょうか?」

シャ「肅清に決まっていますでしょ。歯あ食い縛りなさい!」

黒「ちょ、まつ…ぎゃあああああっ!」

鈴「えーと、前話の後書きでA5編に入ると言っていたのに、空白期を書いたダメ作者は私たちが肅清しておきます。それでは灼眼の転生者、スタートです」(お辞儀すると同時に945を展開。そのまま作者に斬りかかった)

アリ(台本読書中)「あはは…作者さん死ななければいいけど…あ、今回もグダグダですので御注意を。後、私に関しては独自設定が入ります」

空白期 「碧天との遭遇」

ジュエルシード事件が終結してから早三日。騒動自体の存在が消えてしまったため、クロノと同じく何故か事件の事は全員覚えていたアースラクルーは、局員の無断派遣や、負傷した局員の処置などでてんやわんやの大騒ぎ。そのため、普通ならアースラについて行く筈だったアリシアに関しては、生き返らせた私が全権を担う事となつてしまった。

とゆー訳で私は、簡単なメディカルチェックが済んだアリシアと共に（因みにシヤナは自宅でお留守番）、海鳴に戻つて来た訳なんだけど…

「…時の庭園ほどじゃないけど、結構大きな家ね」

「いや、当然だから。とゆーか次元空間内に浮かんでいた島と此処を比べないで」

「あはは…それもそっか」

…隣で笑顔を浮かべるアリシアを見ると、私は罪悪感で押し潰されそうになってしまう。『あの時、もう少し早く玉座の間に着いていれば、今頃テストタロツサ家は一家団欒に暮らす事が出来たのでは無いか』…ってね。…過去を悔やんでも仕方ないって解っているはずなの。…鈴音？……つと。

「大丈夫？ どこか具合でも悪いの？」

…どうやら顔に出ていたらしい。ああもう、止め止め！　こんなこと考えても意味ないんだから、思考禁止！

「あ…ううん。大丈夫、気にしないで。とりあえず、早く家に入るうか」

とりあえず私ははぐらかすために、アリシアを急かして家の中に入っ「パンツ！　パパンツ！」…え!?

『アリシアちゃん、ようこそ月村家へ！』

…扉を開けた私達を待っていたのは、月村姉妹とその専属メイドによるクラッカーの洗礼だった。……シャナ、これどういう状況？

「忍さんにアリシアの事を伝えたらこうなったのよ」「…納得した。忍姉さん、ドッキリとか好きだもんね」

ふと横目でアリシアの方をしてみる……見事に揉みくちやにされてるな。…あ、目で「助けて」って言ってるね。

「（でもごめん。私にあの四人は止められない）……シャナ、私は

ちよつと禁書庫行ってくるから此処は任せた」
「任された。…まあ、何とかやってみるわ」

私はこの状況をシヤナに丸投げして、玄関からすたこら逃走。廊下の曲がり角を何回か曲がって、周りの壁には魔女に関する色々な絵画、真正面には金色の十字架が埋め込まれた壁がある袋小路に辿り着いた。

私は十字架の目の前に移動して、右横に飾ってあるジャンヌ＝ダルクが火炙りにされている絵を外して、指紋認証するための機械を露出させる。そして私は戸惑い無く、薄らと青緑に発光する画面に右掌を置いた。すると、何かを読み込む音が聞こえ始める。

『認証中……………月村鈴音様ト確認。次二声紋認証、及ビパスワード認証ニ移行致シマス』

音が鳴り止むと今度は天井の一部が観音開きのように開けられて、中からマイクとマシンガンが出てきて私に狙いを定める。…………初めてこれを見た時は肝を冷やしたよ。

『博士ノ異常ナ愛情』

「また私は如何にして心配するをやめて水爆を愛するようになったか」

『……………認証致シマシタ』

無機質な声が認証が完了した事を伝えると、マイクとマシンガンが

引っ込み、正面の壁が左右に割れるようにスライドして、石畳の廊下が現れる。……それにしても……

「（何でRODのパスワードをそのまま使ってるんだろ？ いや、そのお陰で楽に入れたんだけど）」

パスワードを決めたどっかの誰かさんに心の中で感謝しながら、私は外した絵を元の場所に掛けてから、廊下を歩きはじめる。すると勝手に音も無く扉が閉まり、辺りは闇に包まれた。私は左手の人差し指で天井を指した後、その先端に自分の炎である蒼炎を灯して、辺りを照らしながら歩を進める。

「（全くもう。照明ぐらい付けなさいって……っと、着いた）」

心の中で悪態を吐いてると、目の前に本棚が四つ現れる。その本棚には本がびっしりと置いてあり、背表紙にはラテン語や古典ギリシヤ語で題名が書かれている。……此処が月村の禁書庫。因みに此処インデックスに置いてある禁書は殆どが原典で、イギリス清教が定めた禁書目録の内、四百冊が此処に置いて在る。……もつとも、私が持ちだした禁書は“徒”が書いた、本来ならこの世に存在しないものだけど。私は炎で本が燃えないように気をつけながら、開いているスペースを探す。

「えっと……ここだね」

そして夜笠を展開して本を取り出し、本棚に収納してそのまま踵を返…

チカツ「!？」

…せなかつた。突如目の中に飛び込んできた青い光の光源を探すために、その方向に左手を翳して見てみる。すると見つけたのは、壁に掛かった鎖によって雁字搦めに縛られた碧い本だった。

「(……こんな本、あつたっけ?)」

そんな疑問を持ちながらその本を手を取ってみる。よく見ると表紙には十字架みたいな紋章が書かれていて、背表紙には何も書かれていない。……本当に一体何の本何だろ？

《…魔力反応を感知》

「え!？」

突然聞こえた電子音に驚いて思わず本を手放してしまう。しかし、手を離れたのに本は未だに浮かんだままである。

「(……てゆーか、今のってもしかしてドイツ語?)」

そんな事を考えてると次の瞬間には、本が表紙と同じ色の光を発しながら勝手に開こうとして、終いには鎖が内圧に耐え切れず砕け散る。私は本のページが勝手に捲られていくのを見ながら、翻訳の自在法「達意の言」を発動させ、瞳の奥に自在式を展開させる。そして、最後のページが捲られると本は勢いよく閉じられ、私の目の前に移動してきた。

《碧天の書、起動》

「碧天の、書？」

《術式蒐集》

また電子音が聞こえると、今度は私の体全体を碧い光が包み込んだ。

「い、一体なぐ、がああああああああああつ！
！」

次の瞬間、私を襲ったのは想像を絶する激痛だった。まるで頭の奥に在る何かの扉を、無理やり抉じ開けられる様な感覚。そしてこの不愉快な感覚と激痛の中、私の意識はそこで途絶えた。

S i d e シャナ

鈴音の姿が見えなくなって早二時間。いくらなんでも帰ってくるのが遅すぎると思った私は、歓迎会を一時的に抜けて鈴音の居る場所に向かっていた。……何でアリシアまで一緒に来たのかは謎だけど。

「それにしても何で付いてきた訳？」

「別に意味は無いよ。ただシャナちゃんは何処に行くのかが気になっただけ」

「小学生かアンタは……」

そんな言い合いをしながら、私達は絵画が飾ってある袋小路に入っていく。

「……此処？」

「うん。そうだよ」

そして一番奥まで進んだ後、私は右横の絵を取り外そうと持ちあげたとき……

『緊急事態発生。緊急事態発生』

「ふえっ！？ 誰！？」

「アリシア、落ち着いて」

突然機械による声が聞こえ始めた。私はアリシアを落ち着かせながら、その音声に耳を傾ける。

『月村鈴音様ノバイタルガ危険域。内部ヨリ早期救出シテ下サイ』

「え、この中に鈴音ちゃんが居るの？」

「バイタル危険域って…まさか!？」

『扉、開放致シマス』

次に音が聞こえると、目の前の壁が左右に分かれて開いた。驚いているアリシアを放っておいて中に進んでみるとそこには…

「……………」

…青い……いや、碧い光から解放され事切れたように倒れる鈴音と、空中に浮かぶ同じ色の光を発する碧い本があった。

「鈴音!」

急いで駆け寄って脈をとる。…よかった、死んではいないね。私がその事に安堵していると、アリシアが走り寄って来た。

「シヤナちゃん! 鈴音ちゃんは!？」

「大丈夫。気絶しているだけだから」

「……よかった。じゃあ早く此処を出ようよ。此処不気味だし」
「そうね。私が鈴音を背負うから、アリシアはその本を私達の部屋に持って行ってくれる？ ちょっと調べたい事があるから」
「了解」

私は鈴音を背負いながらアリシアに指示を下す。その指示通りにアリシアは浮かび続けている本を回収しようと触れ……

《適格者の反応を感知》

……た瞬間にまた本が光り出し、アリシアが碧色の光に包まれた。……
……てゆーか今のってベルカ語？ 達意の言、発動つと。

「ふえ！？ 何々どうなってるの!？」

《……マスター登録完了。只今より碧天の書のマスターは、アリシア・テストロッサとなります》

電子音声が聞こえると碧色の光が弾けた。……成る程ね。

「アリシア。その本型ストレージ……碧天の書にマスター登録されちゃったみたいだよ？」

「ええっ!？ 私魔法の才能なんて無いのに!」

「え、そうなの？ リンカ コアはあるんでしょ？」

「それは、そうだけど……」

アリシアはそれだけ言うと、顔を伏せてしまった。……何か深い事情がありそうね。ま、それはともかく…

「それが何なのかを考えるのは後にして、早く鈴音を部屋に連れて行きましょ。何時までもこんな薄気味悪い所に居たくないし」
「…うん、そうだね」

アリシアはそれだけ言うと碧天の書を手に取った。私はそれを確認すると、踵を返して禁書庫を出た。

s i d e o u t

「…う…う…うん」

次に私が目覚めたとき、私は温かいふかふかの感触に包まれていた。そんな感覚に疑問を持った私は重い瞼を開けて周りを見てみる。

「…あれ？ ーじって…」

そこは光が当たらない真っ暗な禁書庫とは明らかに違う、温かい橙色の光に照らされた部屋だった。……あれ？ 此処って何処？

「目が覚めた？」

そんな考えを巡らせる前に覚えのある声を聞いた私は、重い体を何とか起こして声のした方を見る。そこに居たのは椅子に座っている緋色の髪の相棒だった。私は目を擦りながら彼女に呼び掛ける。

「おはよー、シヤナ」

「おはよーって……今何時だと思ってるの？ 時計を見なさい、時計を」

呆れたようにそう言いながら、シヤナは壁時計を指差した。私は寝ぼけ眼で時計の表示を見て、次の瞬間愕然として目が一気に覚めてしまった。

「……1時、半？」

「そう、午前1時半。そしてここはアンタの部屋だよ」

頭が完全に覚醒したので、改めて周りを注視してみる。……たしかに窓の外は真っ暗だし、温かい橙色の光の光源も私の学習机（と言っても、上に置いてあるのは勉強道具ではなく、タロットカードや自在法が一時的に記録されている栞だけだが）の上に在るスタンド

ライトだった。

「まったく……半日も死んだように寝ていたから心配したんだからね」

「ごめん。そして、心配してくれてありがとう、シャナ。……私、たしか禁書庫に行つて……」

「そこでぶつ倒れているのを私とアリシアが発見したんだよ。……一体禁書庫の中で何があつた訳？」

私は事の顛末をシャナに話した。すると、シャナは「記憶……」と呟いた後思案顔になつたが、すぐに顔を元に戻して机の上に在つた碧色の表紙の本に、棊を挟んでから私に差し出してきた。……これは？

「碧天の書本体よ。でも安心して。記憶蒐集はもう起きないから」

これが碧天の書だと知つて、受け取ろうとした手を即座にひっこめるけど、シャナの言葉を信用して本を受け取つた。シャナは私が本を手にとつたのを見届けた後、淡々と話し始めた。

「この本はおそらく、古代ベルカで製造された大容量ストレージデバイスみたい」

「ベルカ？ ACE5の敵国の？」

「いや、そつちのベルカじゃ無い。遠い昔、次元世界に在つた世界の名前だよ」

「在つた？ じゃあ今は無くなつてるの？」

「うん。国同士で起きた大きな戦争で滅んだの」

戦争で世界が滅ぶってどれだけ規模が大きかったの？ ……いやその前に世界を戦争で滅ぼすなって話だけだ。

「……話を戻すよ。でもその前に、栞を挟んだ頁を開いてみて」

言われたとおりに栞の挟まれた頁を開くと、吃驚して開いた口が塞がらなくなった。だってここに記されてあったのは…

「…なんでこの本にデモンズランスの術式が記されてるの？ だってこれは…」

「そう、ゲームの中に出てくる魔術だよ。でも、それだけじゃない。鈴音が開発した自在式も、転生の自在式以外の全てが記されてるのよ」

私は急いで全部のページを流し読みしてみた。……確かにTOV限定だけどテイルズの術式と、私の開発した自在式の全てが全666頁中、600頁に亘って記されていた。

「一体何で…」

「あくまで私見だけど……このデバイスはアンタの前世の記憶を含んだ、全ての記憶の中から術式だけを抽出して記録したみたいね」

「でも自在式が記録されたのは解るけど、ゲームの術式の原理なん

「私解らないよ？」

「私だつて詳しい事は解らないけど、ゲームで術使用時に魔法陣出てたでしょ。多分それを解析して記録したんじゃないの？ それに発動するかどうかは実験済みだし」

「……納得しかねるけど、そう考えるしかないか。つて、ちょい待ち。今聞き逃せない事が聞こえたような気がしたんですけど？」

「実験つてこれの中の術式使ったの？」

「私じゃ無くて、その本にマスター登録されたアリシアがね。で、封絶内で幾つか試したけど、結果はすべて成功したよ」

「アリシアが、ね……つて待つて。アリシアは魔法が使えなかったんじゃないの？」

「ええ。リンカ コアはあるのに、魔法を行使しようとする、頭がオーバーヒートしちゃうんでしょ？ でもどうやら、この本だけで魔法を行使するための全てのプロセスをやっちゃうみたいなんだよ」

「だからアリシアも魔法が使えと……アリシアへの訓練は？」

「するに決まつてるでしょ。こんな危ないもんが記録されたデバイスのマスターになつたつてのに、訓練させないでほつとけるかつての」

私もまつたく同感なのでうなずいた。だつてティルズの術つて一歩間違えたら国を滅ぼせそうな術だつてあるんだから。この本が奪われて悪用させないためにも、一刻も早くこれを使って自分の身は守れるようにしないとね。でも……

「どしたの？」

「いや、この本の最後の66頁だけ真っ黒に塗りつぶされているのが気になって……」

「……ごめん。それに関しては私にもわからない。探査の自在式かけてもさっぱりだったんだもん」

「そうなんだ……で、シヤナはこの後どうする？ 私は完全に覚醒しちゃったし、ちょうど作りたい自在式もあつたから、ちよつと術式構築やるのかな……って考えてるけど」

「私は寝させてもらうよ。流石に眠いから」

そう言うと、シヤナはすぐに大きな欠伸を一つ。どうやら相当眠かったらしい。私はそれを見て微笑みながらベットを出た。それと入れ替わりにシヤナがベットにダイブ。そのまま健やかな寝息を立てながら寝てしまう。私はシヤナに毛布をかけてから椅子に座り、両掌の間に空っぽの自在式を展開。それを何時ものように指を動かして、自分が望む形に変えていく。私の夜は、まだ始まったばかりだ。

なお、アリシアの訓練は翌日から開始された事を追記しておく。

空白期 「碧天との遭遇」(後書き)

黒「ケホッ、ひどい目にあった」(ズタボロ)

シャ「ったくもう。しかもアリシアが初登場したのに、ほとんど出番ないじゃない…やっぱりもう一度ぼこぼこにしてやるつかしら」
(そう言いながら飛焰を発動)

アリ「し、師匠ストップストップ！ これ以上はオーバーキルですって！」

鈴「で、なんで空白期を書いていたの？」

黒「それを聞く前に945を首筋から外してください。怖いんです」

鈴「ダメに決まってるでしょ」(殺し屋の眼発動)

黒「で、ですよ〜……コホン。今回空白期を書いた理由は、AS編に入ってからだと書きづらい内容を補完するためなのです」

アリ(シヤナを必死に抑えながら)「あ、そのためなんです。そのうちの 하나가、私の強化と」

黒「その通りです。後は八神家との絡みとか、ディバイダーを使った事件とかをやる予定です」

鈴「なるほどね。でも、ディバイダーを使った事件？」

黒「それに関しては、次話でやらせていただきます。それではm」

(飛焰着弾)

アリ(若干涙目)「あー！　すみません作者さん！　抑えきれませんでした！」

シャ「さて、次回もお楽しみに」

鈴(ハリセン装備)「アンタが締めるな！」(スパーン！)

空白期？ 「夜天との再会」(前書き)

黒「連投です」

鈴「早っ！ もう書きあがってたの？」

黒「前話よりこっちのほうが書きやすかったので、早く上がりました」

鈴「で、次話に関しては？」

黒「プロットは出来上がっていますが、ネット環境が微妙です」(落ちこむ)

鈴「できるだけ早く上げなさいよ。では灼眼の転生者、スタートです」

空白期？ 「夜天との再会」

某日、金曜日

アリシアが我が家に居候するようになって一カ月。最初は忍姉さんや、すずかのフランクさに戸惑っていたようだけど、ようやく慣れて来たらしく、徐々にわがままも言うようになってきた今日此の頃。

「えーと……これは違う。こっちは……違うか」

現在私は、アリシアの戦闘訓練をシャナに任せて、とある情報を探すために海鳴市中央図書館を訪れた。因みに、探しているのはソクモン72柱、特にその中の序列43番“墮落の公爵”「Sabno^{サブノ}ck^{ック}」。別名「Sabrac^{サブラク}」に関する詳しい情報である。で、図書館の中からそれらしき記述が書かれていそうな本を片っ端から調べていたのだけれど……

「（……情報が少ない。やっぱり詳しい記述が書かれた本は、禁書登録でもされてるのかな？ でも月村の禁書庫にはその手の本は無かったし……）」

予想通り情報が薄っぺらかった。まあ、普通の図書館に悪魔召喚に

関する本なんて置いてある訳が無いよね。……ん？ 何でそんなもんを探しているのかって？ 自在法を組む時に、その自在法の元ネタ知っておけば組みやすいからですよ。因みに、今組もうとしている自在式の名は『ステイグマ』。将来的には『ステイグマータ』も組みたいところですけどね。……ん？ 無限書庫行け？ 発掘するの何年もかかるから却下です。

「ハア……まあ、無い物をねだってもしょうがないか。時間はかかるけど自力で組もう」

私は溜息一つ吐いた後、本棚に向かい読んでいた本を全部返してまわる。あはは…一度に二十冊は持ちすぎか。次からは止めよう。

三十分後。

「これで、ラスト」

三十分かかってようやく全部返し終えた私は、そのまま出口の方へ足を進…

「…………あれ？」

…ませようとしたり。偶然私の目に入ったのは茶髪をショートカットにした車椅子の少女が、届きそうでも届かない位置に在る本を何とかして取るうとしてしている光景だった。一度は見なかったことにして素通りしたけど…

「（…駄目。やっぱりほつとけない）」

…思い直して踵を返す。そしてその少女の真後ろに移動し、声をかけながら少女が取るうとしていた本へ手を伸ばす。

「取りたいものはこれ？」

「あ、その一つ左や」

…あれ、この声どっかで聞いたことあるような…………いや、気のせいかな。

私は今考えてた事を脳の片隅に追いやり、指定された本を棚から引き抜いて少女に手渡す。

「…………ぞ」

「ああ、おおき…に」

少女の顔を見た瞬間、思わず私はフリーズしてしまった。相手の少女も私の顔を食い入るように見つめている。ま、まさか…

「まさか…ヘカテーちゃん…なんか？」

「そう言うあなたは…ハヤテ…ちゃん？」

私が、嘗て浮遊城内に存在していた彼女のアバター名と思われるものを呟くと、彼女の顔がぱあつと明るくなり、次の瞬間には腕を引っ張られて私は抱きしめられていた。

「うわ〜、久しぶりや〜！ ずっと会いたかったで〜！」

「ちょ…ハヤテちゃん、苦し…というか場所を考えて。此处図書館だから！」

十分後

…結局、ハヤテちゃんを落ち着かせるのに十分近くかかってしまった。てゆーかこの街、サバイバー生還者率何気に高い？

「あはは、ごめんな。取り乱してもうて」

「いって、気にしてないから。図書館じゃなかったら私もはしゃいでたよ」

場所を廊下に移した私達は、互いに再会の喜びを分かち合いながら微笑んだ。

彼女の名は、八神はやて。SAOの中では本名をカタカナにしたハヤテと名乗っていた。そして、私がSAOの中に入って初めてできた友人でもある。

「足の具合はどう？」

「全然や。リハビリは続けてるんやけどな。ピクリとも動かへん」
「…そうなんだ」

はやての足は原因不明の麻痺によって、幼いころから動かないらしい。SAOにダイブした切欠も、足を動かす経験へと、他人と一緒に遊ぶ経験）を与えるために主治医から勧められたからだそうだ。
…その結果。はやては私と同様に浮遊城に二年間閉じ込められ、嫌と言っほど足を動かしていた。ただ、出会った当初は大変だったんだよ。なんせ現実に絶望して自殺を図ろうとしていたのだから。

「まあ大丈夫や。今は現実リアルに絶望してはおらんしな」

「その言葉を聞いて安心したよ。結構心配してたんだから」

「おおきにな。…あ、そや。へ力！鈴音ちゃんの所にもあの手紙、届いたんやないかな？」

「手紙？ …… ああ、特殊学校の入学書の事？」

「そう、それや」

今話題に出た特殊学校とは、SAOに入っていた小・中・高校生が対象の学校である。授業料はすべて政府負担で、二年間の遅れた分を取り戻すために、来年四月に東京に設立されるのだと言う。……最もリスティさんの調べによると、SAO生還者サイバーの中で小学生なのは私達だけのようであるのだが。

「私は転校するつもりだよ。はやてちゃんは？」

「私も転校するつもりやけど…鈴音ちゃんは本当に転校するんか？」

「私はずっと休学中やから思い残しは無いけど」

「転校した方が嘗ての仲間達に会えるしね。言っただけけど今の学校の友達より、こっちの方が思い入れがある」

…まあ、当然である。二年間もあの浮遊城と一緒に戦ってきたのだ。三か月間しか一緒に過ごしていない友達より、思い入れが大きいのはまぎれない事実である。

「…主。此処におられましたか」

「(！?)」

「あ、シグナム」

廊下の先から現れた赤紫色の髪をポニーテールにしている女性を見て、私は反射的に右手をポケットに手をつ込んで、何時でも武装展開できるように身構えてしまう。そうさせたのは、はやてにシグナムと呼ばれた彼女から発する強者の風格であった。私はそれに中てられて、知らず知らずの間に冷や汗をかいてしまう。

「（この人、強い）はやてちゃん、こちらの方は？」

「私の新しい家族や」

「初めまして、シグナムと申します」

「あ、これはご丁寧に。私は月村鈴音と申します」

お互い敬語で自己紹介しあう。ふと、はやての顔を見てみると私達を見てニコニコ笑っていた。……ああ、なるほど。

「（シグナムさんの存在が、今のはやての生きる支えになってるんだ）」

そんな事を思っていたら、突然携帯が震え始めた。急いで番号を確認すると……

「（この番号って……初仕事だね）ごめん。急いで戻らないといけなくなっちゃったから帰るね」

「あ、そうなんか。ほんなら、また今度な」

「うん。じゃあ、またね」

はやてに挨拶し終わると同時にダッシュ。すぐに図書館を出ると盗聴防止の自在式を自身にかけた後、夜笠一瞬展開して中からA・Tを取り出し、階段に腰掛けて足に装備しながら電話に出る……ってうわ、もう日が傾いてる！？ 図書館に入ったのが昼時だから……

六時間も過ぎたんだ。…つと、いけないいけない。

「こつ…こちら囑託魔導師、月村鈴音です。どうぞ」

「『こちら本局運用部、レティ・ロウランです』」

レティ提督。私の魔導師試験のときの試験監督で、本局の運用部に所属している多忙な人である。因みに子持ちらしい。

「仕事ですか？」

「『緊急のね。今すぐ、第三管理世界『ヴァイゼン』に向かって貰いたい』」

「緊急……と言う事は、デイバイダー関連ですか？」

「『その通りよ。犯罪組織の頭領がデイバイダーを使用していて、局員では手に負えないの』」

「あらら…」

どうも、私がこの世界に来る前にもデイバイダーを使用した事件が起きていたみたい。そして何とかまぐれで倒せても、デイバイダーを回収した局員がエクリプスにより暴走して、鎮圧のために住民を全員待避させてから、アルカンシエルを放った事もあるらしい。あ、アルカンシエルって言うのは、着弾地点から数百キロ範囲の空間を歪曲させて、範囲内の物体を対消滅させる魔導砲…だそうだ。

「『引き受けて貰えるかしら？』」

「無論です。月村鈴音、仕事を受領いたします。肉親の許可を貰っ

てから座標を送りますので、そこに転送ポートの展開をお願い致します」

「『解ったわ。詳しい情報は本局の私の部屋で話します。地図データは今転送しているわ』」

レティ提督がそう言うとはほぼ同時に、携帯がメール着信を知らせる音を鳴らした。一旦耳から外して画面を見ると、そこには「新着メール一件 送信者 レティ提督」の文字が出現している。

「今、データ届きました」

「『そう。では、通信終了』」

レティ提督は最後にそう言うのと電話を切った。私は携帯をポケットにしまって自在式を解除しつつ、電話中に装備し終わったA・Tを使って帰路を急いだ。

空白期？ 「夜天との再会」（後書き）

鈴「何危ない自在式組ませようとしてるのアンタは！」（作者をへツドロック）

黒「あだだだ！ ギブギブへぶっ！」（解放されて地面に激突）

鈴「てゆーか、はやてと知り合った方法が、なんか無理やりな気がするんだけど？」（ジト目）

黒（視線をスルー）「ありえなくはないでしょ？ SAO七巻で医療用の出てたし」

鈴「あれは末期患者用でしょうが！」

アリ「まあまあ、落ち着きましょうよ。で、次回でようやく私が活躍できるんだよね？」

黒「その予定。後、シヤナとの師弟コントも予定してる」

アリ「え、何ですかそれ？」

黒「それは次回のお楽しみ」

鈴「では最後に、こんな駄作者が書いた物語を読んただくださる読者の皆様様！ これからも、灼眼の転生者の応援をよろしくお願いいたします！」

空白期？ 「デイバイダーVSデイバイダー」出撃」(前書き)

や、やっと、更新、できました…ガクッ

鈴音「え〜と…作者が気絶してしまいましたので、私が代わりにお伝えいたします。当小説の更新スピードは非常に遅くなってしまいます。誠に申し訳ありません」(頭ペコリ)

シャナ「それでは灼眼の転生者、始まります」

空白期？ 「デイバイダーVSデイバイダー」出撃」

あの通信の後、家に着いた私は忍姉さんに事情を説明して外出許可を貰い、夕食を食べた後、レティ提督に転送ポートを開いてもらうために中庭に出た。

「……………そう言えばアリシア、ヴァイゼンってどんな所？」

私が端末のGPS機能で座標を確認していると、シャナが自身の隣に居る金髪をショートカットにした少女　アリシア・テストアロッサに、これから行く所について聞いていた。因みに、何故アリシアの髪型が変わっているかと言うと、シャナとの近接戦での体の捌き方を実地で教えてる時に髪をばつさり切られてしまったから。本人は元の髪型に戻そうとしているが……………何故だろう。元の髪型に戻した途端に、またシャナによって髪をバツサリ切られてしまい、涙目になったアリシアを幻視してしまうのは。

「行った事は無いけど……………『環境がミッドチルダと似ていてとても過ごし易い所だ』ってお母さんが教えてくれたよ」

「へへ、それは助かるわ。地球と同じように蒸し暑かったら気が滅入るしね」

「師匠、もしかして火の術式を使うのに暑いのが苦手なんですか？」

へく、それは意外かも。…あ、そう言えば最近シャナの元気が無かったのつてもしかしてその所為？ ……あ、ニヤついていたアリシアがぶっ飛ばされた、つてシャナさん？ 何で贅殿遮那セットアップしてるの？ しかも炎纏わせて…まさか！？」

「喰らいなさい、紅蓮の大太刀！」

「それはシャレにゃあああああああつー！」

……教訓、シャナをおちよくるのは絶対にやめよう。下手をすると殺されます。

「…つと、座標情報確認。レティ提督に情報送信……完了」

メールで座標を送ると、一分後には私達の足元に水色の円形魔法陣が展開された。……レティ提督、仕事早くないですか？ 私はレティ提督の仕事の速さに心の中で称賛を贈りつつ、私達の後ろに待機していた忍姉さんに向き合う。

「それじゃあ忍姉さん、いつてきます」

「ええ。みんな、くれぐれも怪我には気を付けてね？」

「任せて、鈴音には傷一つ付けさせないから」

不敵に笑いながらシャナが意思表示をする。…つて私だけ？ アリ

シアは？

「私が直々に鍛えてるんだもん。ほっといても怪我しないでしょ」

「さいですか…」

「怪我をしたのなら、私がすぐ直して見せますよ！ … 師匠達には必要ないかもしれませんが」

いつの間にか復活したアリシアが、こちらは元気よく意思表示をする。

「当たり前よ。格下相手に怪我する訳無いじゃない。それにしてもアリシア、怪我したら… 解ってるでしょうね」

「勿論解っていますよ… だからお仕置きだけは止めてください。

お願いですから断罪をフルパワーで撃たないで下さい（ガタガタ）」

「トラウマスイッチ入っちゃった！？ ああ、よしよし。震えなくて良いからね」

シヤナ、一体何やってるの！？ それ確実にオーバーキルだよね！？
って、顔をそむけるなー！！

「… なんか締まらないわね」

「あはは… まったくですな」と

忍姉さんの言葉に苦笑いで返すとほぼ同時に、円形魔法陣が更に光

り輝く。……時間だね。

「じゃあ改めて、いつてきます」

最後の台詞を言った瞬間に、私達の視界は眩い光で白に塗りつぶされた。

Side 三人称

光が収まると中庭に鈴音達の姿は無く、忍しか残っていなかった。そして忍は両掌を組み、天へと祈り始める。

「……お願い。全員無事に帰ってきて」

それに答えるように星空に一つ、流星が流れた。まるでその願いを、彼女の妹と居候に届けるように。

同時刻。鈴音達の転送は終了し、本局の転送ポートに姿を現していた。

Side out

…視界が回復すると、もうそこは緑豊か中庭では無かった。左横を見ると近未来的なコンソールが広がり、目の前に在るのは、温かみの感じられない金属(?)の壁が続く廊下と、外が見える窓。そして窓から見えるのは幾何学色の空間　次元の海が広がる。はい、やって参りました！　時空管理局本局！

「相変わらず温かみの無い所よね」

「シヤナ？　まだここに来るの二回目だよ？」

「訳解らないこと言ってる師匠はほつといて、早く提督の所に行こうよ。時間もあんまりないだろうし」

「……アリシア。後で覚えときなさいよ」

「ヒツ!?　ごめんなさい師匠！　だからお仕置きだけは勘弁して下さい!」

「あはは……コントやってないでさっさと行くよ」

シヤナとアリシアの師弟コントを苦笑いしつつ急かして、迷路みたいな本局の廊下を歩いていく。まあ、地図データ送ってもらったから多分迷わないでしょう。

三十分後

地図データを頼りに本局内を移動して、目的地に到着……したんだけど…

「鈴音、本当にここで合ってるの？　なんかおかしくない？」

うん、おかしいよね。特に何で窓の外に次元航行船が大量に停泊している事に関してとかね！

「レティさんの執務室って次元航行船の中だっけ？」

「違います。レティ提督は船を所有してませんよ。ボケました？」

「そんな訳無いでしょ！　ああもつ、レティさんの馬鹿！　送る地図データぐらい間違えんな！　絶対会ったら一発殴ってやる！」

「そんなことやったら、暴行罪と上官侮辱罪で軍法会議行きですよ、師匠？」

アリシア、管理局は軍隊じゃないから軍法会議は存在しないでしょ。…いや、軍隊に近い警察機構なんだからあるのかな？　つか何処で身に付けたのよその知識。

…と、心の中で自問自答していたら、手で持っている端末が震えた。すぐにメーカーを起動させて、届いたメールの内容を確認する。…
…って、ショートメール？　一体何だ…！？

『from レティ提督』

『本文 事態急転。急ぎゲートポートへ戻れ』

…本文の内容を見た瞬間に、私は意識を仕事モードに切り替えた。私はポケットの中からハンズフリー・マイクロホンの端末を右耳に取りつけながら、未だに師弟コントを続けている二人に声をかける。

「……シヤナ、アリシア。ゲートポートに戻るよ」

「……はい？」という事よ!？」

「話している暇は無い。とにかく戻るよ!」

そう言いながら全身に身体強化の自在法をかけて、全速力で駆けだす。……後ろが五月蠅いけど、気にしてる暇は無い。まあ、気配は感じ続けているから、付いてはきているんでしょう。

「『……こちら、レティ・ロウラン。鈴音さん、応答を』」

……っと、通信か。私は十字路を速度を落とさずに右に曲がりながら応答する。

「……こちら、月村鈴音。通信感度良好。現状説明をお願いします」

単刀直入に本題へと切り出す。……因みに、この仕事モードはSAO内で身に付けた。何でも屋稼業やっていると、本当に不愉快な顧客に会うこともざらだったから、その応対しているうちに自然と身

に着いてしまったんだよ。

閑話休題

さて、私の口調に一瞬困惑したかのようにレティ提督は言葉を詰まらせた。が、それも一瞬、話を再開させた。

「『……不味い事態に陥ったわ。ついさっき本局上層部がヴァイゼンに向けて、アルカンシエルの使用を決定したのよ』」
「なっ、アルカンシエルを!? 上層部は正気なんですか!?!」

そんな事をやったらヴァイゼンが亡ぶよ!? 誰よ、こんな馬鹿な案だした野郎は!?!

「『私やリンディ、グレアム提督は反対したのだけれど、残念ながら押し切られてしまったわ』」
「現地住民への避難勧告は?」
「『しないそうよ。理由はh「犯人が逃走してしまうから……ですね?」……その通りよ』」

……腐ってやがる。人の命の重みを何にも解っちゃいない。

「『何としてもアルカンシエルが撃たれる前に犯人を止めなさい。』」

これは命令よ』」

「任務了解。制限時間タイムリミットは？」

「『少なくとも、発射準備が整うまで六時間掛かるわ』」

私はそれを聞いて、口角を釣り上げた。……それだけあれば、十二分よ。

「犯人と、そいつが所持しているデバイダーの情報を要求します」

「『あなたの端末に送っています。もうすぐ届く筈よ』」

そう告げられた瞬間にポケットに入れた端末が震えた。……お早い事だ。

「データ届きました」

「『武運を祈るわ。通信終了』」

……つと、電話している間にゲートポートにご到着。そこには、緑……いや、翡翠色かな？ とにかくそんな髪色を持つ眼鏡をかけた女性がゲートの右側にあるコンソールを叩いていた。

「マリエル・アテンザさんですか？」

「あ……はい。囑託魔導師の、月村鈴音ちゃんですね？ 協力者のお

二人は……」

「『ごつちですー！』」

マリエル技官が続きを言う前に、バタバタと走りながら師弟コンビがゲートポートに滑り込んできた。アリシアは疲れたのか、床にペタンと座りこんでしまったが、シャナの方は息を整えると、マリエルさんに向かって敬礼した。

「月村鈴音のパートナーデバイス、シャナと協力者一名。只今到着いたしました」

「うん、御苦労さま」

「こら、アリシア。何時までもへばってるんじゃないの」

「はぁ…もう少し…このままで…居させてください…師匠」

そこまで言い終わると、アリシアの非難の視線が私に飛んでくるが、それを華麗に無視しつつ、左手でポケットから端末を取り出す。

「鈴音、目標のデータは？」

「今表示する」

そう言いながらも指を動かし、空間モニターを可視モードで起動して、さつき届いたデータをそれに表示させる。名前や戸籍情報は一切表示されず、代わりに『大量殺人』と言う罪状と、一枚の写真が表示された。

青空の下で噴水のように噴出し続ける血と、顔は恐怖で歪み手や足を切断され腸をぶちまけた大量の局員&民間人と、口を歪め

ながら不気味に佇んでいる全身血まみれの少年が写っている写真が
……
そいつの両足と両手首から肩まで（一部血で見えないが）緋色の紋
様が刻まれており、両手の甲に装備された大きな爪（形は三国無双
4の張コウの初期装備武器そっくり）は緋色に染まり、血が滴って
いる。

……こりゃ、一般人が見たら卒倒しそうだね。さて、周りの反応は？

「……………（ガタガタガタガタ）」

「…表情から察するにこいつ、殺しに快楽を感じてるわね。とゆー
か、白昼堂々街中でこんなことをするなんて、精神を疑うよ」

アリシアの方は、体を丸めて顔面蒼白で震えている。……まあ、当
たり前か。これ、ホラー映画とかに耐性無いとまともに見れないも
ん。でもシャナ？ なんであなたは写真から得られる情報を冷静に
分析してるのよ。ある意味怖いって。

「精神を疑っても意味無いよ。こいつはエクリプス感染者。両腕に
広がる紋様がその証拠。つまり…」

「エクリプスの強烈な殺人衝動に吞まれ、その傀儡と化した、か。
しかも紋様があそこまで広がっているとと言う事は、病化は末期まで進
んでるね」

エクリプス……感染した場合、病化によって強靱な肉体と自己再生
能力を得るが、代償として殺人衝動に目覚めてしまう危険なウイルス

ス。そして感染者は体のどこかに紋様が浮かび、病化が進むのと同
時進行で身体中に紋様が広がっていく。……今更だけど、ゾンビタ
トウーみたいだよ、これ。『プリフィキアーヴェ使わないと殺せ
ない』…と言う訳じゃないけど。

「でも、第二形態に移行してる形跡は見たところなし。と言う事は
こいつスレイフェイス」

「暴走形態に片足突っ込んでるね。こりや墜ちるのも時間の問題か」
囑託魔導師に任命された初日にレティ提督から渡された資料による
と、エクリプス感染者は第一形態の末期状態のとき、殺人衝動に呑
まれるか否かで別々の形態へ移行する…と、書かれていた。呑まれ
なかった場合は第二形態へ移行。こっちは処置（脳髄を全て摘出し、
クローン技術で生み出した体に移植する）をすればまだ助かる見込
みがあると言う。薬と一生付き合わなければいけないが生存例もあ
る。

だが、殺人衝動に完全に呑まれた場合は暴走形態スレイフェイスに移行する。
助かる見込みは零%。止めるためには殺すしか現状では方法が無い。

因みに暴走と書いて『殺すslay』と読んでるのは、『殺人衝動に
呑まれて暴走し、殺さない限り止まらない』ため、それからとって
誰かが名付けたらしい。……止める為には殺さなきゃいけない…か。

「解ってはいるけど……やっぱり…」

「躊躇う？」

「そりゃそつだよ」

そう言いながら私は両手　　ディバイダ　　を握る手を見る。あの子の命を奪うてあるう手を。

「人の命を奪うことなんて、絶対にやってはいけない事だからね。むしろ、躊躇わない方がおかしい。でも……」

私は右手をギュツと握り、目を瞑る。……覚悟は、決めた。

「私達がやらなきゃ、もっと多くの人が犠牲になる。そんなことは絶対にさせない。そのためだったら……」

目を開き、私の独白をじつと聞いててくれているシヤナを見据える。

「どんな十字架だって私は背負う。一生背負い続ける」
「……うん、それで良い」

独白を終えるとシヤナは一旦目を閉じ、再び目を開けると視線を鋭くして私を睨んでくる。

「でも、その決意は少し間違ってるよ」
「え？」

「『私』じゃなくて『私達』でしょ。一人でそんな重い十字架モを背負おうとしないで」

それから、私に微笑みかけてきた。

「別れていても私は鈴音の半身。それくらいは一緒に背負うよ」

「…ありがとう、シヤナ」

「で、アリシア…」

私が礼を言った直後、シヤナはとある方向に首を向けた。つられて私も見てみると…

「アンタ何時まで震えてるの」

…大きな毛布に包まって未だにガタガタ震えているアリシアが居た。
……っか、その毛布はどっから出したの？

「だ、だって怖くて」

「…はあ。今すぐそれから出なさい。それとも断罪のフルパワー喰らいたい？」

「すぐ出ます！」

低いトーンで発せられたシヤナの脅しに屈したアリシアは、素早く

毛布から飛び出して、パパツとそれを虚空に放り込んだ。……本当
にあれ、どっから出したんだろう？

「（まあ良いか。気にしても仕様がな）マリエル技官。転送ポ
トの調整は後どれくらいで終了しますか？」

「調整は完了したわ。後は座標を入力すればOKよ」

「了解しました。シャナ、アリシア」

「何？（は、はい！）」

ストレッチを始めている相棒と、未だに恐怖が抜けきれないのか、
瞳を不安げに揺らしているアリシアに呼び掛ける。……シャナは問
題ないけど、アリシアの精神状態がちと不味いかな？ ……恐怖に
心を支配されると、体が縮こまっちゃって咄嗟の行動できないし、
鉄火場にそんな奴放り込んだらもれなく死体一体出来上がり……だ。
でも、今回の場合……

「任務の説明をするよ。任務内容は、ホルダーデイバイダー保有者の殺害。
並びに、ターゲットデイバイダーの確保。敗北条件はリミットオーバー制限時間超過。タイムリミット制限時間
は五時間半。なお、ターゲット目標に関しては使用武器が鉄爪である事以外、
一切不明。どんな事があっても動揺しないように」

「OK（り、了解！）」
「陣形はシャナが前衛、アリシアが後衛。私はアリシアの直衛に回
る」

…これは、賭け。本来ならアリシアは出撃させない（殺させたいな
ら話は別だが）所だけど、ターゲットテイルズの魔術は多様性かつ高火力。目

標を素早く撃破する布石になるかもしれない。賭ける物は非常に重いけど、賭けてみる価値はある。……失敗したら、その時は私が…

「みんな、転送準備完了したわよ！」

マリエル技官の言葉でハツと我に帰る……今何を考えてた？ 助けるために我が身を犠牲にしたら意味無いでしょうが！

私はその馬鹿げた考えを消すように、自分の両頬を叩いて気合いを入れる。

「二人とも、行くよ！」

「おう（はい）！」

背後から聞こえる二人の返答を聞いて、私は頬を若干緩める。が、それも一瞬。すぐに顔を引き締めて、さつきと違って強く発光している転送ポートを見据える。そして私達は、その中へ飛び込んだ。

S i d e ????

「はあ…はあ…グ、ガアッ！」

殺セ！ 壊セ！ 殺シ尽クセ！ 衝動二身ヲ委ネルノダ！

「うる、さい！」

言葉と共に俺は壁に頭を思いっきり打ち付け、悪魔の声を振り払う。
……もう、時間がねえ。発作の感覚が短くなってやがる。

「急がねえと……」

俺はふら付きながら、ボイスレコーダーを求めに電気屋へ向かった。
……誰でも良い。

「俺を、止めてくれ」

S i d e o u t

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2511s/>

灼眼の転生者

2011年10月8日09時51分発行